
東方吸血鬼

ふれいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方吸血鬼

【Nコード】

N5449Z

【作者名】

ふれいむ

【あらすじ】

彼は世界で最後の吸血鬼だった。彼の力は皆から恐れられ、すべての人間から追われた。彼は世界から捨てられて、彼も世界を捨てた。そして彼は自ら幻想の存在となった。

ついた先は遙か昔、彼は第二の人生をどう生きる？

これは彼が世界に、人々の心に受け入れられていくちよっぴりおかしな物語。

葛藤は全ての輪廻が、因果応報で全てのピースが噛み合って見えてくるのは……

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる

俺には力があつた、人を超えた力があつた。圧倒的な強さ、子供が持つには大きすぎる、絶対という言葉で形容されてもおかしくはない力を持っていた。正確には、もともと持っていた力と、与えられた力。

けれどもそれで手にするものは？ 何もなかった。あつたのは俺を異端扱いする眼だけ。

ただ忌み嫌われて、追われて、居場所がなくなって。どうしようもなくなって逃げた。

それを、みんなは煙たがるように自分たちから遠ざけた、俺は一人だった。

この原因はなぜか？ 俺が吸血鬼だからだ。既におとぎ話となっている存在。俺はそんな存在であった。

俺は十四歳の冬の日、この世の最後の吸血鬼になった。

西暦4039年、今年で俺は2050歳。既に成長は中学生のうち止まり、老化も止まる。

翼が生えてきたのはいつだったか、俺の今までの人生を血で塗るかのような深紅の翼。爪も牙も鋭くなり。日光、流水、純銀、同時に弱点も生まれた。

黒く、地面につくほどの長いコート。顔を隠すフード。ただし、翼を通す穴だけは開いていた。

それは、俺が夜に紛れる為の。黒に染まるためのものだった。

左頬の金色の痣、三つ巴を描くそれは吸血鬼の証。レミリアにはこんなものがないが……理由はわからない。

世界が俺を捨てたように、俺も世界を捨てた。

俺は遥か昔、とある存在と出会った。

東方projectというゲームの世界、きっかけはどうに忘れてしまったが。

「幻想郷はすべてを受け入れる」、その言葉は彼にとって何とも言えない響きを持っていた。

もし、これが本当にあるものだったなら……俺だって受け入れてもらえる、異端として追いついてるのではなく、一つの存在として受け入れてもらえる。それを夢見てた。

吸血鬼が実際に受け入れられている世界、俺は望んでいた。

そう、こうして2000年間の間。俺はすべてに忘れ去られるように、日の当たらないところで死に近い生活をしていた。

もし、それが本当に存在するものだとなった時は、どれだけ感涙に浸ったことか。

俺は、その理想郷を目指すようになった、誰でもない、自分の居場所を求めて……

そしてある日、俺はたどり着いた。全てを受け入れる理想郷への扉を見つけた。

そして、今夜が決行の日。

俺は自ら幻想への扉を開く、不可視にて、その存在が絶対な。それを――――――

その日、世界から一人の青年が、幻想の存在となった。

気がつけば俺は見知らぬ場所にいた。今は夜か、星空がきれいだ、俺はこのままこの輝きを見ないで、束縛された永遠をただ生きるだけの存在として生きるはずだった。その輪廻から俺は抜け出した。俺はたどり着いたんだ。

ここは神社の境内か。目の前に建物があるのに歩き出せない。けれどもここは幻想郷のどこだろう？ どこかで見たことがあるような気がする。しかし考える暇を時は与えてくれなかった。

疲れという抵抗不可のものが、俺に襲いかかる。おれはその場に崩れ落ち、眠りに落ちた……………

傍に、憧れの存在を目指した。黒い日傘が音を立てて落ちた。装飾も何もないシンプルなそれは、彼の性格を物語っていた。

そして、入れ違いになるように神社の障子が開かれ、彼を見つけ出し、中へと運び込んだ。

彼の日傘を見て、不思議には思ったけれども考えないことにした。ただ、彼を保護したのであった。

温かい、ぬくもりを感じる、これが遥か昔に俺に向けられなくなった感情なのか？

今ではそれさえもわからない。ここはどこなんだ？

冷静になって今の状況を見てみる、ここは……おそらくさっきの神社の中であろう、どことなくそれらしい雰囲気漂っている……足音が聞こえるな、俺を助けてくれた人であろうか？　だとしたら助かった。

あの日差しの中に取り残されていたら俺は今頃灰になっていただろう。これは、俺が受け入れられたということか。なんだか嬉しいな、涙が出そうだ。こういう風に泣きそうになったのは何年振りだろう？

俺は、これを求めていたのか。しかし、みっともない姿を見せるのは少し嫌な感じがするな、堂々としておこうか。

そうして部屋に入ってきたのは、俺の予想もしない人物だったけど。そう……

「（諏訪子様……だと……）」

そう、どこからどう見てもあの東方の洩矢諏訪子だったのだから。驚きを通り越す。

「目が覚めたみたいだね、元気かい？」

「ああ、助けてくれて感謝する」

ああ、さすがにいきなり名前で呼ぶわけにはいかないからってなんて言おうか考えてたら……てんぱって無愛想になってしまった。

「私は洩矢諏訪子、あんたはなんていうの？」

「俺か？ 人間だったころの名前は千年以上も前に捨てた。それ以来名前なんか使う機会なかったし、そんなものはない」

諏訪子は驚き、特に千年のところで大きく驚いた。確かに俺はかなり年上なんだろうけどさ。未来人だけど。そしておそらく興味本位で聞いてきたのだろう。どうしてそんなことになったのかな。

「ねえ、よかったらあんたについて詳しく教えてくれない？ お近づきのしるしに」

「別にかまわないけど、あまり気分がいい話とはお世辞にも言えない。それでもいいのか？」

それに本当のことをすべて話すのはできない、ここが東方という世界だということに関しては本人たちが知ってはいけないことだろう。なぜだかそれだけはわかる。

「別にいいよ、話してもらえただけでありがたいんだから」

俺は少し間をおいて、ゆっくりと全てのことを話しだした。

多少変えてはいるが、東方の存在を知らず、気が付いたらここにいたということにしておけばいいだろう。それでも十分筋は通った話にはなる。さあ、これが俺の腐りきった人生さ。

長い間話した、醜いことをすべて吐き散らした、残ったのは空っぽの器だけだった。

そして、諏訪子がゆっくりと口を開いた。

「じゃあさ、よくわからないけど、こっちでみんなに受け入れてもらえばいいんじゃない？ 最低でも私はあんたの味方でいてあげるからさ」

「そうか、ありがとう」

満足した様子で、彼は笑みを浮かべた。それは、彼の人生の中で、

一番綺麗なものだった。

「じゃあ教えてくれないか？ 今度は君の事を」

彼の大きな疑問、それは、ここが守矢神社なら本来いるべきあとの二人がいらないこと。彼はそれを自然に聞き出そうとした。そして得た答えはとてもではないが考えられないものだった。

——ここは、幻想郷ができた時代よりはるか昔、諏訪大戦よりも少し昔であったのだから。

彼は驚きはしたが、悲しみはしなかった。だって彼が得られる結果はどちらでも変わりはないのだから。

「とりあえず、うちで暮らしていかないかい。あんたがいると退屈しなさそうだ」

言葉の奥には、同情とはまた違う意味が込められていた。神と人間との差を理解している彼女だからわかる、種族の違いという壁の辛さ。それを彼に感じたからだった。

「そうか、だったら好意に甘えろとしよう。これからよろしく頼む。わかっているとは思うが、精神が死に切った世捨て吸血鬼だが、それなりに役には立つだろう」

自分で自傷していても、何も感じない。それは成長なのか退化なのか？

「じゃあさ、名前を決めようよ。ここで暮すんだからあんたじゃ不便だしさ。どうだい、自分でかっこいい名前でもつけてみたらどうだい？」

「名前か、考えたことはあまりなかったな……いつそのことこの吸血鬼としての力からとってしまおうか。そうだな、あかはね紅羽きり霧、こう名乗らせてもらうか。自分という吸血鬼はここにいるという意味としておこう。この名前が俺の存在の証明となるように」

「いい名前じゃないか、じゃあ早速信頼の意味でご飯にしよう。何か食べたいものはあるかい？」

……正直に言ったらまずいよなあ、人間の血液、できれば若い人の希望なんて。

ここは適当な動物で我慢するしかないのか。さすがに自分の領土の人間が被害にあっている顔はしないだろう。

けどなあ、俺千年単位で血を摂取してないわけで、できれば人のやつがいいんだけどなあ。まあ贅沢は言ってられないか。

「……食べ物ならなんでもいいけど、できれば動物の血でもあるとうれしい」

「ああなるほど、仮にも吸血鬼ってことなら……今から適当に猪でも捕まえてくるから待ってて」

……以外に野生児な神様だったんだな、諏訪子って。まあ以外というわけでもないけど、むしろ妖精とかと一緒に遊んでそうな雰囲気あるし。

まあ昼間は迷惑かけちゃうかもしれないけど、基本夜型だし、大丈夫だろう。

さて、ここは信頼の証が来るのを待たせてもらいますか。

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる（後書き）

はじめましての方ははじめまして、他の小説を読んでもうございまして、ふれいむです。

今回は過去転生最強ものに手を出してみました。どうかこれからもよろしく願います。

感想指摘評価、なんでも待っています！

男は自らの忌み嫌われた力を見る

食事の時間が終わった。

言った通り本当に猪を捕まえてきた諏訪子、ちなみに久しぶりに飲んだ血でテンションが上がって、一敵残らず飲み干してしまった。

とりあえず今は、案内された日光を完全にシャットアウトできるといふ部屋にいる。

そこで諏訪子とこれからのことを話し合うつもりだ。

しかしこの時代でもう日光を完全に遮ることができるなんて、案外建築技術は昔っからの受け売りなのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、諏訪子が口を開いた。

「じゃあさ、とりあえず霧は夜型なわけだ、じゃあ私が寝てる間に霧が活動をして、昼間はその逆になるってことだね」

「ああ、日が沈んでいる間は俺も自由に行動できるから、今日みたいなことはしなくても大丈夫だ、適当な動物でも襲って食べてるさ」

諏訪子は一瞬迷った顔をしてから答えた。

「人間じゃないんだね」

「さすがに諏訪子の領土で他の吸血鬼を作るつもりはないさ、いや、永遠に作るつもりはない。人間の血が足りなくて、禁断症状らしきものが出たなら、適当にこっそり抜き取るさ。牙を使わずにな。まあそんなことはめったにないが」

だけど、千年以上まったく活動しないことによって今まで耐えてきたのだ、どうなるかはわからないが……

諏訪子は俺の事情を知っているだけあってすぐに納得してくれた、俺が自分と同じような境遇の人間を作りたくないということを悟ってくれたのだろう。

「とりあえず、夜と昼の境目の短い時間しか話ができない。けれどもどちらもし寝ないくらいどうってことないからな。そこは問題がないだろう」

神も吸血鬼も一日二日の徹夜でへばったりはしない。

その気になれば、諏訪子はずっと寝なくても大丈夫だろう。俺はやっぱりなるけれども。

とにかく、夜型と昼型の同居でも、まったく問題がないわけだ。

「じゃあさ、もしいいんなら霧の力を見せてよ。人間から追われるほどの力を見てみたいしさ」

……なるほど、確かに気になるな、という方が無理かもしれないな。けれども……いや、ここはすべてを受け入れるのだから、俺の力はむしろ知ってもらった方がいいだろう。その方がいいぞという時に役に立つかもしれない。

そのとき諏訪子は、考え事をしているときに霧の翼がびくびく動くというかわいらしい癖を見つけた。もちろん内緒にするが。いざという時にばらすつもりであらう。

「わかった、じゃあ今夜、日が落ちたら見せてやる」

「じゃあ今はとりあえずここにいな、何かあったら呼んでちょうだい」

諏訪子は部屋から出て行った。

残されたのは静寂だった、しかし、ここは俺の隠れ住んでいた場所の静寂とは違う。あくまで静まり返る中にも、目に見えない光があった。

本当に、諏訪子の優しさに感謝する。もし境内で灰となって一生を終えていたら、自分は浮かばれなかったであろうから。

「さて、夜まで眠っておこうか、久しぶりの夜を満喫するためにも」

俺は早速、丁寧にひかれていた布団に入って眠りについた、まだ疲れが残っていたのだろうか、あっさり眠れてしまった。

「もう日が暮れたよ、そろそろ起きたらどうだい？」

この声は……諏訪子か、もう夜だというのか。

目を開けて周りを見渡すと、窓があいているのにも関わらず、入ってくるのは太陽の光ではなく、優しい月の光であった。

「目が覚めた？ 約束の夜だよ」

ああ、そういえば俺の力を見せるという約束だったな、すっかり忘れていた。

「じゃあここから離れよう、一応直ぐに衰弱して死ぬ程度まで力を出せば、地形を変える程度の力はあるものでな。どこか広い所がいい」

「広いところねえ……まあついてきて」

いま俺が言ったことは本当だ、ただ俺には二つの力があり、片方は人間だったころから持っていた。万能で代償がない。これは能力ではなく俺の特殊性だ。魔法でもなく、純粹な俺の力だ。

もう一つは吸血鬼になってから手に入れた力、いわゆる「○○程度の能力」だ。

代償がある代わりに超強力で山を分断する。しかし後先を考えず、全力で撃てば俺はすぐになんとかしないと死んでしまう程度に衰弱する。（吸血鬼の生命力でだ、普通の人間なら速攻死に至る）

まあ、今日はどちらも見せてやろうじゃないか。

諏訪子について行くように翼を羽ばたかせた。遅れないように飛んでいく。

久しぶりの感覚だが、体は鈍っていないようだ。これなら能力の方も大丈夫だろう。

この世界では、隠す必要もないんだ。存分に恩恵に授かろうじゃないか！

「ついたよ、これだけ広さがあれば足りるかい？」

「ああ、十分だ。じゃあ早速見せてやろうじゃないか」

俺と諏訪子は広場の真ん中にいる。この広場、天然のものらしく人の手が入っていないらしい。広さも大体20×20mくらい、十分だ。これだけあればある程度はできる。あくまである程度だが。

「じゃあまずは俺の力から見せよう。これが俺の紫黒^{しぐろ}だ」

手で空を切ると、その手に現れたのは剣、紫とも黒とも言えない色をしており、生きているかのような生々しさと光沢を感じるものだ、一応金属ではあるが、感じられる異常性という面ではどんなものでも霞んで見える。

「なんだいこれ？ 見たところ無機物みたいだけど……」

「紫黒、無限に体積を変え、自在に形を変え、適応して質量を変え。これは俺の体の一部、左手の甲から出てきているのはわかるが、詳しいことはわからない」

厨二全開だが本当にそうなんだ。紫黒は俺の自在に動く、いわば半身と言ってもいい。

この力のせいで、俺の人生は狂ったが、今こうしていられるのなら安い対価なのかもしれない。

「それじゃあもう一つは危ないから、ちょっと離れて」

諏訪子は言われたとおりに少し後ずさる、まあ俺だってそっちの方には被害が行かないようにするけどさ。

「これが俺の能力、「血を力に変える程度の能力」。自らの力の根源は、自らの血液という神秘性にある。吸血鬼にぴったりの能力だ」

自分の血液の一部を消費、自らを取り囲む霧へと姿を変える。色は俺の紫黒と同じ色だ。

これも俺の左手の甲から発せられているためであろうが……詳しい理由はわからない。

そんなことを考えているうちに、俺の体の半分が霧に包まれた。

「それが霧の地形を変える力かい？」

「ああ、これをこうすれば地面を掘れるぞ」

左手を前につきだすと、霧がかなりの速度で地面をこすりながら前へと進んでいく、不思議と音は聞こえない。

全てが通り過ぎると、ただ3m近く掘られた溝が、端が見えないほどにどこまでも続いていた。

「できる限り抑えてこんな感じだな」

「言葉が出ないよ、それでできる限り抑えただって？ 私もそこまでやるのに結構苦労するのに……」

しかし、俺だって左手の甲から血が出てきている、もうこの部分だけ痛みになれてしまったくらいだ。

「とまあ、とにかくこれで一部だとわかってくれればいい。それに俺にはまだもう一つあるしな」

コートの中から取り出されたのは魔剣ダーインスレイヴ、一度鞘から抜けば一度生血を吸い、誰かを死に追いやるまで鞘には戻らない、その一閃は的をやたまず、決して癒えない傷を残す。血を求める魔剣。

「これが俺が吸血鬼になったとき、最後の吸血鬼に選別をくれてやると言ってもらったものだ、一度抜けば、生血を浴びるまで決して鞘には戻らない」

「よくわからないけど、とりあえず勝手に抜いちゃあいけないのはわかったよ、けどまあそこまで力があつたなんてねえ、もう私には理解しきれないよ」

そこまでなるのか、まあそれでいいのかもしれないが。強すぎる力は持ち主を滅ぼす。

そんなものは知識としても持っていない方がいい、そうだろう。とりあえず簡単にだが、俺の力は見せた。これで納得してもらえるのだからこれでいいだろう。

「さて、これだけ見れば十分なんだろう？ 戻ろうじゃないか」

「そうだね、まあ飛びながらも話は出来る」

俺たちは同時に飛び立ち、平行になるように速度を保った。

「ねえ、どうしてそんな力があるんだい？」

「俺にわかったら苦労はしない、だったらとうに解決しているさ、俺が人間を追われることなどなかったよ」

「そう、何か悪いこと聞いちゃったね」

素直に謝る諏訪子、俺だってあまり触れられたくはないが、こっちはもう違うんだ。

確かに人間たち眼には異形に映って、忌み嫌われるかもしれない。けれども、諏訪子たちみたいな存在にとっては何ともないんだ、幻想郷が出来てからは、本当に人間たちからも受け入れてもらえるんだから、それまでの辛抱だ、なにも何千年か立てば時は来るんだ、それまで我慢すればいいだけの話、それに神や、妖怪たちは俺のことを認めてくれる、それで十分なのさ。

「なあ、神様やっててさ、人間の中に混じっていろいろできたらな、とか思ったことない？」

「そりゃあるさ、私だってずっと一人なのは嫌だよ。けどまあ今まで何ともなかったんだけどね、まあ正直に言っちゃえば一緒になっ

て騒ぎたいよ。けどさ、それが出来ないから信仰と恩恵という形になったんだ。私はこの理を覆してまで、壊してまでとは思わない。だってそれが皆の幸せにつながってるんだから」

……そうか、言われてみればそんな気がしなくもないな、俺は何か勘違いをしていた……というわけでもないな、だって俺のしてきたことは無駄ではなかったんだから、人間に近づこうとして、それでも人間というコミュニティから追い出されて、それでもここに來られたんだから。たどり着いたんだから。それでいいじゃないか。

俺は世界の理を変えるつもりはない、ただちよつとだけ自分が幸せになりたいだけなんだ。

「なんとなく、わかった気がするよ。ありがとう」

「お礼を言われることを何かしたっけ？　まあ素直に受け取ってえおくよ」

「そうしてくれ」

俺は今日、一つの結末と答えを得た、けれどもそれが本当に正しいのかは誰にもわからない。

けどさ、ただ一つわかるのは俺のこれからの一生は、とんでもなく面白そうだってことだ。

なんであつて？　こんなに素敵な仲間がいるんだぜ、それにさ「

」なんだから。

「ねえ、帰ったら一杯やらないかい？」

「酒は久しぶりだな、よし乗った、俺も賛成だ」

「じゃあ少し急ごうか」

夜空に二つの影が一閃した。

縁側から、月を眺めて二人で飲む酒、少し前までは考えられなかった体験だ。

「ねえ、霧は神についてどう思う？」

「神か？ 諏訪子みたいなのが最初の知り合いだと分かんないかな」

「なかなか言うねえ」

こんな風に俺は、なんだかんだいって俺は、人間が大好きなんだ。神様だって吸血鬼だって大好きなんだ。

けど、ちょっとだけ歯車が噛み合わなかっただけ。けど、俺がそれに気が付くまでに、あとどのくらいかかるのかな？

「とりあえずさ、これから一緒に暮らしていくんだ、よろしく頼むよ」

「それはこちらのセリフだ、むしろこっちが言うべきセリフだろう」

確かにね、と諏訪子が笑う。俺もつられて笑う。

けれど今気がついた。とても重要なことを忘れていた。俺には笑顔なんてものまで、枯れていたのか。

俺は今、本気で心の底から楽しいと思った、そんな思いを込めて笑った。心の底から今が楽しいと思った、だからこうやって笑顔になった。

だからこうして、また生きる気力がわいているんだ。

「それじゃあ、遅くなったけど乾杯しよう、霧に、私に、この世界に」

「そうだな。俺もそんな気分なんだ」

もう手をつけた酒だけど、乾杯をする。俺はこうしてこの世界に受け入れられた――――

男は自らの忌み嫌われた力を見る（後書き）

非常に能力紹介が急展開になってしまいました、まあこれから何度も出てくるものなのでこのくらいがいいのかもしれませんが。じゃないと、全部わかっていたら面白くありませんし……まあこんなものだとわかってくれればOKです。

ダーインスレイヴはそうですね、気になる方はwikiってください。まあ僕も要約して説明したんで、あれが分かっているればほとんど説明したようなものです。

これからは、素直に日常生活を書こうと思っています。

諏訪大戦とかいつ出すか考えなきゃ……（汗）

歴史は変わらなくても波紋は広がる

俺は夜を駆ける、それが俺の生き様だから。
血を求める、それが必要なことであり、自らの糧となるから。
そして、今新しい犠牲が生まれた。

「うん、鹿の血もなかなか……」

野鹿の首に口を当てて、食事を開始する霧。もちろん肉までおいしくいただく。

本当なら人間であつた方がいいが、別に大丈夫なようになっている。それが二千年の歳月の力。力は強力になり、それと同時に臨機応変なものとなる。

これが毎日の彼の食事、もうすでに諏訪子のもとに住み始めて早一ヶ月。特に代わり映えのない日常に退屈はなく、むしろ充実様で感じていた。

諏訪子の手合わせに何度か付き合つた。神の力は強力であるが、それでも二千年の歳月を覆すほどには至らない。ただし、これには？ただし夜に限る？という一文をつければの話だが。

「なんか、ただしいケメンに限るって言われて虚しくなるのがわかる気がする……」

確かに夜の帝王である彼も、昼間はただの妖怪にすぎない。それは昔から決まりきっていることである、人間さえも認識していることだ、いまさらどうしようという気持ちはない。ただ、何か知ら方法があるのなら別だが、それが起こり得ないことなのは、おそらくこの世界の住人の誰よりも詳しいことだろう。

それが彼の運命、すべてを知りえるものとしての定めなのだからどうしようもない。

そして今、今度は動物ではなく妖怪がその力の餌食となる瞬間がやってきた――

現れたのは妖怪、姿から察するに蜘蛛の妖怪、夜中に獲物を求めて徘徊していたところ、俺という標的を見つけたということだろう。

感じられる明らかな殺意は、捕食対象にしか向けられないものだった。

ただし、相手が悪かったけれども……

「久しぶりに、全力でお相手するか。二千年のうっぶん晴らしになるといいけど……」

期待はあまりできないだろう、力はあまり感じられない。

先手を譲らせてみる、蜘蛛らしく糸をはいてくるが……俺には無意味だ、そんなもの止まって見える。

紫黒を手には纏う、形は……大きな爪にしておこう。

糸を避ければ、全速力で本体へと接近していき腹を貫く。一連の動きは洗練されたものだが、その場の対応はできないだろう、あくまで決められた型を再現しただけなんだから。

そのまま虚空へと抜けた霧の体は、今の成果などなかったかのような素振りさえ見せた。

彼にとっては当たり前の結果なのだから、仕方のないことなのだが。

全力を出し切る前に終わってしまった勝負を悔やむ様子はあるが、彼にはむしろそれでよかったのかもしれない。それはなぜか？

「最近西日本の方が騒がしいらしいし、神様と戦うのならそこら辺の妖怪はオーバーキルの方がいいだろうしな」

そう、最近西日本の方で次々と先住の神たちを破り、配下に従えているという国があるという話を聞いた。間違いなく神奈子のところに違いない。

もうすぐ諏訪大戦が始まるということだ。

おそらく自分が加担しても、結果は変わらないようにはなっているのだろう。けれども今までの諏訪子に借りっぱなしの恩を返すにはこの場しかない。

自分が参加し、できるだけ戦果をあげること、洩矢神の評判をあげるくらいは自分にもできるだろう。おそらく一番奮闘した神として歴史に名を残せば、諏訪子もまあ、悪い気はするだろうが満更でもないだろう。

そのため、自分が大戦に参加し、歴史を覆すぎりぎりのことをするのは俺の中では最早規定事項だ。つまり神奈子に対応できる力がほしい、そのためにはそこら辺の妖怪などはオーバーキルでいて、なおかつ強敵との戦い方を磨かなければならない。なかなか複雑な悩みだが、自分には力がある、おそらくぶっつけ本番で慣れていくという戦法もありっちゃあり、というわけだ。まあそれが意味することは一つではないのだが……

要するにだ、神奈子と戦うにしても別に戦い方というものを身につける必要はないが、その代わりに現地で対応法を習得しなければならぬ。

もしかすると諏訪子と神奈子の頂上対決という可能性もあるわけで、この根回しはすべて無駄になる可能性もあるが、おそらく神奈子の味方の神様は貧弱ではあるまい。

まとめると、今の自分に必要なのは対応力だ。それだけだ。

こんなに長々と俺の戦略を読者の方々に話させてもらったがそう言うことだ、まあ無駄にはなるまい。

とにかく、もうすぐ諏訪大戦が始まるということは間違いないのだ、それなりの蓄えも戦力も諏訪子を用意してある、ミシヤクジ達の強さはわからないけどもそれなりの戦力にはなるはずだ。せいぜい負け戦を全力で行うとしよう。恩人の名誉のために。

「さて、もうすぐ夜明けだし、諏訪子も起きてくるだろう。そろそろ神社にもどるとしますか」

今日も一日が始まる――

いや、もちろん俺にとっては終わるだよ。勘違いしないでくれよな。

帰ったら諏訪子がもう起きていて、そのことについて少し話したが、まだ先のことだと思っているようだ。

それもそうだろう、だってまだ噂が広まってくる程度のことなのだから、騒ぎからは遠いということだ。

とにかく、俺は眠りに就くこととしよう。

「あゝ、霧も寝ちゃったし暇だなあ」

縁側に座り、足をぶらぶらさせる諏訪子。神の威厳などそこにはどこにもなかった。

しかし、戦が確実に迫ってきているなかでの戦力強化という面の仕事はなにも怠っていない。既にミシャクジ達もいざ戦が起これば戦ってくれるように約束してある、それは諏訪子に対する信頼の表れか、それともただ自分たちの居場所を守りたいだけか？ それは誰にもわからないことだ。

「お？ 参拝客じゃないか、朝っぱらから熱心だねえ」

こっそりとのぞき見をする諏訪子、神がそんなこととしていいのかは知らないが、それでも好奇心には勝てないようだ。

「どんなこと話してるのかな……？」

「国境の方の村から聞いた話んだけどさ、隣の国までついに占領されたらしいよ」

「はあ、それじゃあ西日本はほぼ全滅だなあ」

「そうそう、神様がなんとかしてくれないかねえ……」

……隣の国まで？

自分が思っていた以上にことが進んでいることに驚きを隠せない、また、ここまで迫ってきているにも関わらずあちらのことを何もつかめていない、それがどれだけ恐ろしいことかわかっている諏訪子は、眠りについたばかりの同居人にそのことを告げに走る。

強引に目を覚まさせ、寝ぼけ眼の霧に全てを話した頃にお互いの考えは一つにまとまっていた。

そう、ミシャクジ達にこのことを伝え、全面戦争の手筈を今すぐに整えること。

自分たちは貴重な戦力であると同時に、決してかけてはならないまとめ役なのだ。その任務をこなさなくてはならない。

明日にでも諏訪大戦が始まる、霧はそう認識した、おそらく相手は奇襲を作戦としているはず、ならば目には目を、逆にこちらがしてしまえばいい。

けれども堂々と宣戦布告をしてきたならば、こちらも全力で対処する。

いつの間にか諏訪子はどこかに行ってしまったていた、おそらく国境にミシャクジ達を集めるためだろう。

今日の夜にでも俺も移動することになる、準備ぐらひは済ませておこう。

とはいってもそんなものはないんだけどな、せいぜいたっぷり寝ておくとうるか。

それから諏訪子が返ってきたのは、夕方のことだった。

そして夜が更け、零時を回った後に俺は諏訪子にこのように伝えられた。

まず、夜になったら国境に自分たちも移動する、相手は人間以上の存在らしいから、こちらでもミシャクジ達と俺たち二人が全戦力になるということだ。

そして夜の間に、俺には神奈子たちがいつごろ攻めてくる探ってきてほしいとのこと、おそらく俺単体を送り込むということだろう。見つかった場合はこちらからの宣戦布告でも送っておけとのこと、要するに奇襲の線をなくしたいわけだろう、それが諏訪子の考えた戦略なんだから文句は言わない。

要するに、夜限定の俺の強さを十分に利用するというわけだ、十分な戦略家ではあるのだろう、単純だが、使えるものはすべて使う精神は称賛に値するものだ。

とにかく今夜が決行の日だ。もう既にあたりは暗闇に包まれている、俺の準備次第でいつでもいいらしい。

「じゃあ今すぐにも言ってこよう、早い方がいいんだろ？」

「悪いね、それじゃあ幸運を祈るよ」

俺は返事をせずに飛び立った、しかしこのままでは見つかる可能性も大きい。

俺の気配は夜に紛れる、気配遮断と同じような感じで見ていいだろう。それでも念には念を入れておくのが一番だ。

まあ、俺の五感は夜にはより一層冴えることとなる、相手がこちらを見つけるのより先にこちらから相手を見つけられるであろう。

それよりも怖いのはいざ侵入してからだ、神奈子のような力のあるものまでごまかせるか？ それはもうかけでしかないであろう、とにかくやってみなければわからない。

さて、早速大きい気配を見つけた、しかしこちらに気づいている様子はない。

そのまま迂回すれば気づかれることなどあるまい。

このように、俺は確実に本丸へと移動する。本丸とはいっても拠点の一つしかないわけだが。

そして俺は本拠地までたどり着いた、中には神奈子の姿も見える。俺は近くの木の子にとまり、できるだけ気配を小さく保つ、不特定

多数の人間から逃げてきた俺にとってこのくらいはお手の物だ。

そして丁度行われている会議の内容に耳を傾ける。

なんでも明日の日が明ける前に攻め込んでくるようだ、今の時期で言ったら大体日の出の二時間前だろう。俺にとって若干有利な時間である。

その後も話の流れを聞いた、その他には特にこちらの利益となりそうな話はなく、そのままお開きとなった。

そして部屋には神奈子だけが残され、俺もそろそろ帰るとするか。

俺は再び空へと駆ける、十分もあれば諏訪子のところに戻るであろう。

俺が戻ると、諏訪子はすぐに結果を聞いてきた。

「明日の朝、日の出の二時間くらい前に攻めてくるそうだ」

「そう、だったらまだ一日あるし余裕もあるみたいだね。とにかく、あとのことは私がやっておくからもう休んでいいよ」

「わかった、じゃあそうさせてもらうよ」

さてと、ちょっと早いけど寝ておくか、どうせ一日中戦うことになるかもしれないんだから。

さて、決戦は明日なわけか。せいぜい頑張るとするか――

大きな戦いは大きくも小さい結果を生んだ

決戦の時はもう一時間以内にやってくる。たった今諏訪子に起こされ、そう言われた。

どうやら思いのほか寝ていたらしい、確かにもうあたりは真っ暗、ほぼ丸一日寝ていたと言われても納得できる。まあ速攻起こされたという線もあるのだが、さすがにそれはないだろう。

しかし吸血鬼の体のリズムってのはおかしいもんだ、早寝早起き（朝寝夕方起き）の練習でもやっとかないとダメかもな。

まあ今日に限っては好都合なわけだけれど。日が昇ったら俺は半分無力化される、それまで万全で動けるのならばそれでいい。一応一番の戦力なんだから、夜限定の。

「諏訪子、本当に先手を譲る気か？」

「うん、向こうは完全な奇襲だと思い込んでるはずだから、だってこっちを探るようなことは言っていなかったんでしょ？」

確かに、それもそうだけど。

「私は直接大将を狙いに行くから、霧はとにかく暴れて頂戴」

諏訪子と神奈子の一騎打ちってわけか、そうなりそうだとは思ったけどな。

「まあとにかくついてきて、何があってもすぐに対応できるようにしなくちゃならないんだから」

とにかく、作戦は諏訪子任せなんだから文句は言えない。俺は諏訪子にできるだけ手を貸すことしかできないんだから。

それから三十分ほどたった今、ついに時は来た。

向こうの軍勢には神々しさというか、すべてをひれ伏させるようなオーラがある。おそらくあれが神力であろう。つまり、オール神の軍勢というわけだ。

こちらは一応崇り神なんだけど……どうも一線を越えている雰囲気がある。

そして、俺たちの計画にも狂いが出てきた、それは……

先陣を切ってこちらに向かってくるガンキャノン……あれを神奈子と言わずに何という。

そう、まさかの大将が先陣を切ってきたのだから驚きである、それは自信の表れか、無鉄砲さか。おそらくは前者であろう。ここまで無敗の実力は決して馬鹿にはできないはずだ。

「諏訪子、何となく雰囲気でわかってると思うが、あいつが大将

だ」

「たしかに一番力がでかいねえ、じゃあ私はいつを狙えばいいんだ」

そういうことだ。

「じゃあ行ってくるよ、そっちもへまするんじゃないよ！」

あたりまえだ、吸血鬼なめてると痛い目見るぞ。

さてと、俺は適当に片っ端からぶっ倒せばいいんだな、守りの方はミシャクジ達なんあとかするだろう、俺は数を減らすのが一番の仕事だ。

さてと、俺も出陣と行くか。

怪物が、解き放たれた。

迫りくる神々の軍勢に俺が先陣を切って立ち向かう。ミシャクジ達

も俺の破壊力は聞いているみたいだから全力を出してかまわないだろう。

向き合った軍勢、一発目は俺がぶっ放す。

俺は左手の手袋を脱ぎ、体に霧をまとった。手の甲からは少しばかり血があふれる。

けれどもそんなことを気にしたりはしない、あくまで初撃を成功させることに集中する。

そして解き放つ、俺の破壊の霧を————

それは全てを削り取る、すべてから削り取る。向こうの神々には悪いけど、本気を出させてもらおう。俺の二千年間の集大成をここ出す。

破壊が始まった。

「なんだいなんだい、力のある奴がいるじゃないか。これは楽しみがあるねえ」

「ふん、あんたの部下たちなんか速攻かたづけられてこっちにくるよ、降伏するならいまのうちだね」

空に向き合う二人、誰も邪魔は入らない。いや、入れない。
それほどまでに大将戦は他の神々の戦いとは次元が違うのだ。

無音が途切れた時が戦いの始まりである、そして静寂は途切れた。

「とりやああー………っ！」

「はああああー………っ！」

オンバシラが飛び交う、諏訪子はそれを縫うように避けながら確実に接近していく。

神同士の争いは実力的にはほぼ互角。どちらも譲らない。

幾度のやりとりが交わされただろう。一騎打ちは壮絶なものとなった。

オンバシラが諏訪子に幾本も向かう、それを諏訪子は土や岩などを使い、盾にしたり反撃したりなど、様々な駆け引きがされている。

そして一本が諏訪子の岩の盾を打ち砕く、それを慌てて避けた後、破片により身を隠しながら反撃をする。

いつしか神奈子の背後にはいくつもの岩が投擲されていた。それにギリギリまで気がつけなかった神奈子は慌てて背後にオンバシラを投擲し、相殺していく。

けれどもそれは諏訪子に背中を向けるということ、そこで登場したのは洩矢の必殺兵器。

「くられ、鉄の輪！」

諏訪子の周りから、次々と形成され飛んでいく鉄の輪、これには神奈子も回避行動をとるが自然と劣勢に傾いていくのは必然である。

諏訪子が勝利を確信したその時、形成は変わった。

神奈子が蔓を出したのだ。

蔓は鉄の輪をからめ取り、同時に諏訪子のところまで伸びていく。自慢の鉄の輪も一度勢いを失えばただの鉄の塊だ。

勝負はわからなくなった。

ミシャクジ達は置いてきた、自分一人でどんどん敵中をくぐりぬけていく。

あるものは紫黒の餌食に、あるものは能力で蹴散らした。それでも彼はまだ、血を求める魔剣を抜いていない、いや、抜く気はないだろう。そこまでしなくても自分は大丈夫、そういう絶対的

な自信があり、事実があった。

しよせん神奈子以外の神などこんなもの、中には力の強い神がいたが霧のなかに消え去った。

そこは彼の独壇場、邪魔する者などいなかった。

「畜生、諏訪子は劣勢か」

こちらが回ることもできるが、それでは今度正面突破が防げなくなってしまうかもしれない、俺の目的はできるだけ拮抗した負けを用意すること。そのためにはどちらがいいか……もちろん敵の数を減らすことだ。

次の軍勢が来る、一人目が切りかかってくるが、俺はそれを紫黒で受け流してそこから帰りうちにする。

つぎは紫黒を変形させ、ハンマーのようにして二人ほど叩き潰した。まあ神様はこんなことでは死なないが、さすがに戦闘不能にはなるだろう。

固まった相手が来たら霧を使う。吸血鬼にとって血というのは特別な意味を持つ、そこで俺の持つ血を力するという能力はとんでもない強さとなるのだ。

もちろん俺は軽めにはなっても、受け止める側にとっては必至、それでも蹴散らされてそこらじゅうに舞って行く。

このままではきりがないので、大きく控えている後ろの軍勢を丸ごと潰してしまおう。

「吹っ飛べ！」

左手の流血がひどくなる、けれどもこれくらいなんでもない。

そして渾身の力を込めて放たれた一撃は。後方に構えていた敵の軍勢の半数を消し飛ばした。

けれどもミシャクジ達の力はたかが知れている、それに半数とはいっても元の数が多いすぎるのだ。相手の方が人数はまだ倍以上はある。

このままではまだ劣勢だろう。俺がなんとかしなければなるまい。そうではなくては負けるんだから。

「それで終わりだって言うんなら興ざめだよ」

「まだまだこれからだよ！」

とはいっても鉄の輪がすべて防がれている状態でどうやって巻き返せば……

唯一の勝機は、鉄の輪を防いでいる間はこちらに攻撃する余裕がな

いことだけど、それなら攻撃を続けて機会を待つしかないみたいだね。

とにかく全力で、あの蔓の防御を抜ければ私の勝ちなんだから！

しかし、諏訪子は自分の頭上に迫るオンバシラに気がついていなかった。

霧は驚愕していた、突然諏訪子が撃墜された。
そのとき取った行動は一つ。彼は諏訪子を受け止めるために翼を広げた。

結果的にそれは間に合った、諏訪子を受け止めた霧は神奈子を見つめる。

「おや、主催の登場かい？」

「よくわかったじゃねえか、俺が一番力があるって」

諏訪子をミシャクジに預けると、俺は神奈子に立ち向かう。おそろくここで勝てても負けても結果は変わらない。けれども、圧倒的な力の前に半数を削るも敗北。よりは大将を倒して惜しくも敗北の方がいいじゃないか！

緊迫した雰囲気ができる、俺も神奈子もどうやら一発勝負で決着をつける気らしい、俺としては助かった。もう俺には時間がない。

「じゃあとつとと決着つけるとしようか」

「望むところだね、むしろそのまま逃げるんじゃないかと思ったけど……どうやら本気で来るらしいね」

俺も神奈子も既に力をためている。そしてその力は解き放たれた。

俺の霧と、神奈子の蔓が互いに一步も譲らない進展を繰り広げている。

俺の左手の甲はすでに真っ赤に染まっていた、これはさすがに終わったら狩りにでも行ってくるか。

お互いに一步も譲らない、俺だってこれ以上出力を上げたら衰弱して戦えなくなっちゃう。さすがにちょっと調子に乗りすぎたか……

そしてしばらく続いたこの勝負、決着の時がやってきた。

「残念、時間切れだ」

「どういことだい？ まさか今更逃げようって魂胆じゃないよね？」

「違う、日の出だよ」

そう、地平線から少しずつ、光が見える。このままでは俺は灰になるだろう。

俺は攻撃をやめ、蔓の猛攻を避け切ると日傘をさした。

「俺の負けだ、時間内に決着をつけられなかったからな——」

俺が離れてからの勝負は一気に形勢逆転があっでみでいる方も驚かされた。

俺一人の影響力というものがどれだけすごいのか、初めて実感できたのかもしれない。

結果的には負けた、神社は歴史通りに神奈子のものとなり、すべて収まった。

諏訪子も最初はあーだこーだ言ったけど、最後には納得して神社を明け渡した。まあそれでも神社に神が二人いる状況になっているだけに、決着としては珍しい方法なのかもしれない。

まあ結果としては同居人が一人増え、諏訪子が暇になって、信仰は神奈子が受ける。もちろん諏訪子を信仰する人もいるが。

とにかく、俺の生活はほとんど何も変わらない、あれほどの争いがあつたとしても残るのはそれだけなんだ。

神と神とは言っても、所詮はそこまでのかもしれない。もしかするとそうなるように仕組んだのかもしれない、それは誰にもわからない。

そして今俺は、三人で食卓を囲んでいる。これだって事実を知っているから驚かないが、普通の人間視点から見たらかなりシニールなことになってるんだろうな。

「あつ、神奈子、それ私の魚！」

「なにおう、早い者勝ちだい」

「人の皿にのってるものは早い者勝ちなんかじゃないよ！」

……騒がしいです。

けど、これが俺の望んだ日常なんだ。なんだかんだいって、俺はこ

うして受け入れられていくんだから――

力という大木は確実に枝を伸ばす

「やっぱり格好いい方がいいんじゃない？」

「けどわかりやすさも大切なんじゃないのかねえ」

「俺としては気合いが入るといいうか、ズバツと決まる名前がいいな」

「それは言ってるねえ、諏訪子、言いだしっぺなんだから何かいいのだったらどうだい？」

「神奈子だってさっきからダサいのばっかじゃないか、ネーミングセンスも何もないじゃん」

「使ってる本人がそんなもののかけらもないんだし、案外シンプルに攻めてみない？」

えっ、今何をしてるのかって？ 名前を決めてるんだよ。理由がわからないなら……とりあえずこういうことがあったってことだ――

俺は「血を力に変える程度の能力」を持っている、しかし俺はそれを全然生かそうとしないで、霧を出すことにしか使っていない。

それではもったいないじゃないか、という意見を諏訪子から頂いた。確かに、俺は能力よりも紫黒の方が使いやすくてそちらに頼り気味だ。誰だって進んで大小のあるものを使おうとは思えないだろう。それに、余計なものまで壊してしまうから嫌なんだ。その点でも優れているのだから使い勝手的には最高なんだし。

「しかしなあ、新しい使い方なんてどうやったらいいと思う？」

「私に聞かれてもねえ、霧が一番わかってるんじゃないの？」

神社のことはすべて神奈子がやるようになり、必然的に諏訪子は暇になる。

なので暇つぶしも兼ねて俺の能力強化に付き合ってもらっているわけだ。

しかし、俺も本当に自分の能力がどんなものなのか理解しきれていない、大雑把な能力ほどそうなるらしいが……べつに俺の場合用途は限定されているためにそうでもないはずだ。

「たとえばさ、どんな力に変えられるのか試してみたらいいんじゃない？ いつもとは違う風に能力を使うとか」

「なるほどねえ、下手な鉄砲も数打ちゃ当たるというけどさ。確かにその通りかもしれないねえ」

「そういうこと」

なるほど……とりあえず軽く霧を出してみる。これくらいなら血も出てこないし痛くもない。

ここからどうにかして別の要素を加えるわけだけど……別に他の使い方があると決まったわけでもないのに気が遠くなる話だ。まあ時間はたっぷりあるのだし。何とかなるだろう、ならなかったらそれが結果だ。

「とにかくやってみることにする、危ないから一応離れて」

諏訪子が俺から離れたのを確認すると、早速取りかかる。

手探りで力の出し方を変えていく、けれどもそれは霧の発生が不安定になるだけで何の効果もなかった。

それでも思いつく限りのパターンを試してみる。俺に霊力や妖力があつたなら話は別だが、残念ながら諏訪子曰くそんなものはひとかけらもなく、逆に珍しいらしい。

なんでもどんなに小さい量でも人間には霊力が、妖怪には妖力が、神には神力があるらしい。俺には全くないそうだ。

これは諏訪子の推測だが、俺の紫黒がその代わりを果たしているのではないかということ。

たしかにこれは俺が生まれつき所有していたものだし、その可能性はゼロではないのかもしれない。

話をもどそう、俺に霊力や妖力があれば、それを使って工夫をすることができ、けれども俺にはそんなもの全くないために紫黒を組み込むか、能力の使い方を一歩変えてみるしかないのだ。

そんな選択肢のない状況でなんとか新しい力を見つけるのは、逆に簡単というべきか逆に難しいというべきか、もしくは素直に簡単か難しいか、それはわからない。

とにかく、俺が思いつく限りのパターンを試していくだけだ。

諏訪子は自分の背中に冷たいものが通るのを感じた。

なぜだかはわからない、ただ神の勘が危ないと、そう言っているのだ。

思いつく理由は一つしかない、それは霧。

もしかすると目覚めた新しい能力はとんでもないものなのかもしれない、または使い方がわからずに全力で放てば……どうなるかはわからない。

諏訪子は本能に任せて逃げ出した。そしてその瞬間、黒く紫な炎がその場を包み込んだ。

諏訪子は一歩遅かった時の自分を想像し、今度からはもっと離れようと心に誓った。

「これは……紫黒と同じ色の炎、つまり俺の能力でいいのか」

自分でも驚愕している、失敗を前提で繰り返していおた作業で成功を収めたのだから。

一度出してしまえばあとは楽だ、自在に炎が出せた。

遠くに避難した諏訪子の姿を確認し、炎をしまった後、手招きをした。

不思議と、すべてを飲み込みながら進んでいた炎は跡形もなく消え去った。

霧も炎も自在に出せる、けれども同時には出せない。もう少し練習すればどうにかなるのだろうか。

ともかく不自然なことが一つだけ、それは確かに燃え残った灰がその場にあるのにも関わらず炎だけが消えたこと。ますます自分の能力がわからなくなる。

しかしその思考は諏訪子の声によって中断させられた。

「いやゝ、とんでもないものが眠ってたじゃないか」

「俺も驚いてるよ、ともかく新しい力と言うのは素直に喜んでおこう」

こんなに簡単に見つかってしまった俺の力、もしかすると俺もまだまだ成長する余地があるのかもしれない。

「じゃあさ、名前考えようよ名前、いつまでも無言で使うよりその方がいいでしょ」

「たしかに言われてみれば名前もつけてないな、たしかに不完全燃烧と言うか、名前があった方が使いやすいという気持ちはある」

「（だってその方が格好いいし）」

「（名前言った方が行くぞって感じが出るな）」

こうして俺の技の名前を考えることになりました、はい、時系列元に戻ります。

とまあ、神社のテーブルを神二人と吸血鬼で囲んで何を話しているのかと思ったらそんなことなんだ。けどまあ俺にとってはある意味死活問題でもあるわけだしな、これからずっと付き合っていくことになるわけなんだし。

「やっぱり紫黒とおんなじ色をしてるんだし、紫黒なんたらとかどうかな？」

「けどもねえ、まあそれはそれでいいんじゃないかな？」

こういう話し合いがだんだん適当になってくるのはおそらく必然であろう、だって実際に本人だってつまらないんだから。

まあもつと自分の技に責任をもて、とか言われたらそうなんだけどさ、だって正直かつこいい名前があったって格好良く見えるのかは俺次第なんだろ？ 正直俺は何事も名前は二の次だと思うんだ。

「思っただけどさあ、全部素直に紫黒にしちゃったらいんじゃないや

ない？」

……なるほど！ シンプルだけどいいかもしれない。

「俺はそれでいいかもしれない、だってこれだって紫黒と同じ色なんだし、シンプルでしかもひとまとめにできるなら」

「なるほど、あくまで原点は同じ……私もそれでいいとは思うけど」

「じゃあ決定！ 霧の技は全て紫黒でくくられることになりました！」

はい、なんともパツとしない理由で俺の技の名前は決まったのでした、えっ何？ 前と変わってないじゃんって？ 別に俺は気にしないからいいんだよ。

なんともいえない微妙な空気になってるが、とりあえず決まったものは決まったんだ、本人の同意の上なんだからそんな微妙そうな顔しないで、二人とも。

しかしこの微妙な空気を取っ払う方法はただ一つ……

「ねえ二人とも、そろそろ飯にしない？」

今思い返せば、俺食事は自分一人で済ませてるんだよな、このときは本当に失念していた。

ええ、見事に悪い方向に進んじやいましたよ。文句あるんですか？

ともかく、俺はめでたく能力全般は紫黒と言う名前になった、と言うことで少し進展したことがある。

使い慣れた名前でも、やっぱり名前が付くと霧にしても炎にしてもイメージがわきやすい、これが固有名詞の力なんだろうか？　ともかく、何か形が決まったような感じがする。

名前を付けると愛着がわくというが、それに近いものであろうか？　縁側で諏訪子と話しながら考える。

「なあ諏訪子、俺の力って未知数じゃん、だからそのうち旅にでも出てみようかと思うんだ」

「いきなりどうしてそんなこと？」

「いや、ただ単に世界を見たいんだよ。自分がこれから過ごしていく世界がどんなものなのかとか、まあ単純に力を伸ばすという面でもさ」

俺もよくわからないんだ、自分がどうしてこんなこと思ったのかなんて。

「別に私は止めないよ、霧の好きにしたらいいさ。ただし、ここにいつか戻ってきてくれるんならね」

その言葉の奥の意味を、霧に理解することは不可能だった。おそらくはそのままの意味でとらえたのだろう。

「私も止めはしないさ、別に旅なんか男なら誰もが憧れるものなんだろう？　それに、霧の人生は霧が決めたらどうだい？」

「神奈子もそう言ってくれるのなら……そうだね、何か機会があれば本当に行こうと思う。まあそれまでは世話になることになるから、よろしく」

諏訪子が今日はもう寝ると言って無言で寝室へと向かって行った、俺は特に気に留めず、お休みと言った。

「（

）」

諏訪子は一人、布団の中で考える――

後に残された霧と神奈子、先に口を開いたのは神奈子だった。

「もし旅に出るのなら土産は期待してるよ」

「期待されておくよ、まあ期待に添えるかどうかはわからないけど

さ」

たった一言ずつの言葉で、お互いはお互いの意思を読み取った。それは二人だけの約束、けれども神奈子は諏訪子の気持ちは何となくわかっていた。

霧はわかっていなかった、それだけで、とても大きいそれだけでたった一つのとても重要なことだけは伝わらなかった。

「じゃあ私もそろそろ寝るとするかな」

「じゃあ俺はひとつ飛びしてくるよ、まあ長ければ何百年かはここにいるわけなんだから、そんなにすぐのことでもないしあせらず考えようよ」

「それもそうだ、じゃあ私は寝るからね、お休み」

俺が返事をする前に部屋の中に入って行ってしまった。

じゃあ俺はこの後も能力の練習とかしてみようかな。もしかするとこの調子でなにか新しく見つかるかもしれないし。

俺はついさつき炎を出したばかりの広場へと向かった、まあ徒労に終わるのかもしれないけれども。

俺も原作キャラには早く会ってみたいし、そのためには力をつけておかないと。世の中何が起こるかかわからないしね。

神をも悩ませる悩みは乙女の悩み

昨日俺はいつか旅に出る宣言を出した、とはいってもきっかけがあればの話だけだな、俺的には昨日の夜に思いついた、平安時代になったら輝夜に会いに行くというプラン、とまあなんとも気の長い話だが、を立てている。まあ吸血鬼の寿命から考えるとそうでもないのかもしれないけれども、というか何年生きられるのかわからん。誰か教えてくれ。

とにかく、現在は弥生時代あたりなんだから……まあだいぶ遠いのは確かだ。

つまりそれまではここに腰を据えるということだ。

要するにそれまではニート生活を満喫するってことさ。

しかしまだ日が昇っているうちに起きてしまった、俺は暗い部屋から出て行けないし、諏訪子や神奈子が来てくれないとんでもなく退屈なわけで、今は紫黒を使って等身大諏訪子作りに挑戦している。とはいっても念じるだけで大体はできるので、細かいところの調節だけ。

この際ゆっくり諏訪子とゆっくり神奈子……いや、本人たちの名誉とストレスメーターのために止めておくか。素直にこれで満足しよう。

でもちょっとだけ作ってみたり……

ゆっくりしていいね!!

俺はなんだか嫌な予感がしたので作業を中断した、とにかく暇つぶしは等身大諏訪子で事足りるだろう。

縁側に座って、ため息をつく諏訪子に不意打ちで声をかけてみる。

「ねえ諏訪子、あんた霧に気があるんだろ？」

「ぶはっっ！　なんてこと言うのさ神奈子」

お茶を盛大に吹きだしたね、その反応は凶星なんだろう。

見ててそれらしいとは思ってたんだよ、霧がいつか旅に出るって言った時のリアクションとか他にもいろいろとね。霧は気がついていないみたいけどねえ、まあそんな経験なかったみたいだし、女の仕事をどう捉えてみたらいいかわからないって言われても納得はいくさ。

けど私の眼はごまかせないよ。

「霧のどこがいいんだい？」

「私にもわからないよ、けどさ、何か気になるんだよね」

それを世間では好きって言っただよ。

「いっそのことアタックしてみたらどうだい？」

「考えてはいるよ、けどきつかけがつかめないというかね」

「好機を逃したら一生回ってこないかもしれないのに、早めにする
ことに変わりはないね」

私達は神だけどさ、考えることは人間と何も変わらない。こうやって恋の病に悩むのだって人間と同じなんだ。神だからって答えがすぐ出るってわけじゃない。

それに、難しい問題なのも本人はわかっているんだろう。理由はまとめきれないくらいにいろいろあるさ。それこそ文章に表しきれないくらいにね。

まあ私が口をはさんでいいかと言われても、微妙なところなんだけどさ、まあ応援はするよ、曲がりなりにもこうして話し合える立場にはあるんだしね。

同居人の幸せを祈るのは当然じゃないか？

「じゃあさ、神奈子は好きな人ができたらどうする？」

「私？ そうだねえ、とっとと告白ちまうかなあ、玉砕しても成立しても後悔はしないと思うさ」

「それは神奈子が強いからでしょ」

「弱音はいてんじゃないよ、いつもの強気な諏訪子は何処行っただい？」

聞いた話ではまだ出会ってから一ヶ月ほどしか経っていないらしいけど。本当にわからないものなんだね、それだけ霧の魅力があるのか、それとも……

とにかく、私が言ってやれることはただ一つ。

「諏訪子は諏訪子で攻めなさい、そうしないと落としたって意味がないからね」

私は返事を聞かないうちに退散することにした、今日も色々仕事は残ってるし、本当にうれしい忙しさだしね。

まあ二人の関係がどうなるか、気にならないわけじゃない。けれども私は自分と言う立場から、何をすればいいのかわかっているつもりだし、気長に構えるさ。

さて、変に諏訪子が固まっちゃわなきゃいいけどね、そんなことになったら後味が悪いし。

何より私が一番気まずいじゃないか。

「はあ、どうすればいいのかなあ」

本当に心から思っていること。それは伝えるべきか、それともこのまましまいこんでおくべきか。

本当に迷うね、もし霧が受け入れてくれたとしても、それで霧を縛り付けちゃうようなことになっちゃうのだけは嫌だしね。

なんとかなるって信じるのは勝手だけど、信じられた結果は裏切る

のも勝手なんだ。どうなるのかなんて誰にもわからない。百パーセントなんて空想の産物なんだ。そんなものは、ただの偶然の産物で、現在の過程を示しているだけのものなんだから。それがいつ覆されるのかなんて、それこそ神にもわからない。それこそ私だってわからないんだからさ。

ほんとうにどうしたものか……

とのかく、今日は普通に接してみよう。そうやって少しずつ決めて行けばいいんだから。

確かに時間は長いようで短いんだけど。それでもなんとかできるところまではやってみようと決めたんだからね。

「おーい諏訪子、ちょっとこれ見てくれよ」

これは霧の声、ああそうだね、もう日が沈んでるじゃないか。私とすることがこんなことにも気がつかないなんてね。

とにかく普通に接する……それで何の用なんだろう？

振り返るとそこには等身大の私がいた。

「かなり上手に作ったつもりなんだけど……どうかな？」

「本人が驚くくらいに精巧にできてる」

ああそうだ。この調子じゃないか。焦らずになんとかして見せない
とね。

なんだか諏訪子の様子がいつもと違ったような気がするけど……別に気のせいかな？

今はいつもの諏訪子なんだし、俺の気のせいであろう。そんなこと気に病む必要なんかない。

けども等身大諏訪子のクオリティーが高すぎる、これが紫黒の全力なんだろうか？

これはいろいろ試しがいがある、もしかすると戦闘にも応用できるかも知れない。いろんな形作れる方が便利だしね。

けども、一つだけ感じることもある。それは諏訪子から感じられる神力が最近減ってきているということ。どうしてだろうか？

ただ単に隠しているだけかもしれないし、他に理由があるのかもしれないけども俺には分からない。

まあ話したい時が来たら、俺にも話してくれるんだろう。余計な詮索はしないさ。

ただ……やっぱり私の力は減ってる、神奈子に信仰が行くようにな

って、私の信仰が薄れてきているんだ。
まだ減ってきているだけでなんともないけど、いつかは消えてしま
うかもしれない。

まあ本当に気が遠くなる話だけど……活動する力も足りなくなつて
寝たきりになるとか、それくらいにはなつてしまうだから。

時間はたくさんあるけど無限って言うわけじゃないんだ、それなり
の覚悟は決めておくつもりだけどねえ。やっぱり思いを伝えるにし
ても早め早めがいいってことかな……

ただいつにしようかねえ、それだけが本当に悩みさ。
まあこればかりは自分に頼るしかないってことかな。

「諏訪子、なに魂抜かれたような顔してんのさ」

「ああ悪いね、ちょっと考え事してた」

「諏訪子らしくない、とにかく俺は今日も食事してくるから」

そう言ってまたどこかに行ってしまった。今から追いかけても追い
つけないよねえ、だって普段一緒に飛ぶときだって向こうはだいたい
抑えてくれてるんだから、やっぱり曲がりなりにも吸血鬼なんだね。

「神奈子、覗き見は良くないんじゃない？」

「なんだ、あんたのことを心配してやってんのに。まあとにかくこ
の調子でいけば？」

「そうさせてもらうよ、まああんたの言う通りなのかもしれないしね」

二人は無言で見つめあう、言いたいことはそれですべて伝わったようだ。

「あゝ、どっかにとんでもなくおいしい血の鹿でも歩いてないかな」

そんな神×2の気持ちになんか全く気がついていない霧は、今日も今日とて獲物を探す。

「しかしなあ、本当に最近諏訪子の挙動がおかしいような気がするんだけど……別に早期にかけてるとそうでもないんだよなあ」

つくづく鈍感である、まあ彼の生涯はこんな体験とは程遠いものだったために、翔がないと言えましょうがないのだが。誰かを好きになってる暇があったら他のことをしなければ生きていけない様な生活だったのだから。

「うーん、確かかぐや姫って平安時代の話なんだし、それまでできるような暇つぶしでも考えないといけないなあ。なんか彫り物でもやってみるとか……いや、俺に会ってないし、紫黒の方が何かしていて楽しい。それよりは新しい能力見つけたほうがいいのかもしいないなあ」

とりあえず修行でもしてみるか、と勝手に結論を出しておく。実際それ以外にすることがあまりない。

せめてボードゲームの一つでもあったらいいのになあ、この時代でそんなもの要求する方がおかしいとは思うけども。今度紫黒で作ってみるか。以外に二人ともはまったりしてな。

しかし旅に出るって言ったって俺の飛ぶ早さは日本の北から南まで渡るのにもそんなにかからないんだから。本当に直ぐに戻ってこられるのも確かなんだ。

おっと、獲物発見、今日は熊で我慢しとくか……この時代に熊って贅沢なのかな？ 食べ終わったら毛皮だけにして近所の村にでも送ってやるか。親切な妖怪よりって感じでいいだろうか？ やっぱりご自由にお使い下さいとかでいいのかな？

俺は食事プラス贈り物を捕まえに急降下した。

翌日、熊の毛皮の服のオークションがあったのはまた別の話。

「神奈子、幸せってなんだと思う？」

「なんだい、いきなりそんなこと」

「いや別に、特に理由はないかなあ？」

寝る前に少しだけ話をする二人、別にどうってことない話だが、今の状況ではなんとなく意味のある話になるのではないか？ 特に恋の話に後からついてくるような話ではないか。

「幸せねえ、別に定義なんかないんじゃない？」

「そんなこといわれたら余計に分かんなくなっちゃうじゃん」

神奈子は笑いだし、諏訪子は妙にふてくされた感じになった。

「別に、そんなこと考えてたら何やっても幸せになんかなれないよ。そんなことよりもさ、もっと自分のことでも考えてみたらどうだい？ 全員が百パーセント幸せになるなんて無理なんだから」

諏訪子はどうやら余計にわからなくなってきたようだ、神だっという時に悩まないことなんてない。むしろ神だからこそその悩みもあるかもしれない。

「考えるより行動したら？」

「まだ先になりそうだけどね」

まだ一方的な思いが、通じあうかどうかはまだわからない。
それはもう少し先の話なんだから――

神をも悩ませる悩みは乙女の悩み（後書き）

えーと、なんか最初の方が読みやすい様な気がしてくるこの頃です。本当に一話が一番面白いんじゃないか……？

次の話は、かぐや姫の噂が守矢神社まで伝わってくる程度に有名になったころまで話を飛ばしたいと思います。

平安京に行こう！ 的な感じで。

原作キャラもどんどん増やしていきたいと思っています。

吸血鬼と姫は互に関係を結ぶ

時は平安、都からかぐや姫の噂が守屋神社にも伝わってきた。特徴からして輝夜に間違いないだろう。そして俺は都までやってきて、輝夜の屋敷を探している。

「多分一番賑やかなところだろう、となるとあっちかな？」

噂によると五つの難題はもう出してしまったらしい、少し残念。

えっ、守矢神社のほうはどうなったって？ そんなに知りたいか、じゃあ回想始めるぞ。

「というわけで、都に行こうと思います」

「あんたねえ……そんなに美人がいいのかい？」

確かに、これじゃあ誤解を招いてしまう。せめて俺がかぐや姫に会いたい理由を言わなければなるまい。

「実はさ、かぐや姫って俺のもといた世界でも結構有名な話なわけですよ、それも千三百年後にもきっちり伝わってるくらい。てなわ

けでそんな有名人を見たいと思うのはあたりまえじゃないですかね？」

……嘘はついてないもん、東方のことには何にも触れてないけど確かに有名だもん、日本で一番古いんだもん、俺そう習ったよ。まあその後二千年くらいたったからどうなったのかは知らないけど。

ともかく本当に有名なんだから。それに原作キャラだし会わないわけにはいかない！

「まあいいんじゃない？ そんなに有名なら気になるなって言う方が無理があるんだし」

「それもそうだね、私は許可するよ。ただここにちよくちよく戻ってくるよ」

「わかった、じゃあ早速行ってくるよ」

そう言っただけ俺は縁側の方へと歩いて行く、もともと荷物なんかないんだしそもそも衣食住だって現地調達で間に合ってるんだ。本当に必要なものがない。

「じゃあそう言うことで頼むから」

「ああいうことだけは迅速だねえ、もう見えなくなっちゃった」

神社に残されたのは諏訪子と神奈子、あまりの行動の速さに呆れかけている。

そこで口を開いたのは神奈子、今まで何の進展もなかった乙女の悩みに疑問を持つのは当然だ。対象がどこかに長い間いなくなるという

うのに、黙って見送ったのだから。

「いいのかい？　行かせちゃって」

「いいんだよ、強引に止めてもいいことはないんだし」

どこか清々しくも物悲しい顔で言いきった、ただ胸の奥はどうなっているのか？

それは本人もわかっているのかすらわからない。

「時間はどのくらいあるんだい？」

「うーん、力としてはかなり弱くなってるし。もう少して眠ることになるかもしれない」

だったらなおさら……そう言いかけた言葉を押しとどめる。

「やばくなったら連れてくるさ」

「なら私も手遅れになる前に協力してやるよ」

協定が結ばれた。

しかしなあ、都の夜ってもう少し賑やかかと思ったら以外にパツとしない。俺だってもといた時代のレベルを欲求なんてしないから、もう少し華やかでいてほしかった。

ともかく、はるか上空から吸血鬼の視力頼みで探していると、一際大きな屋敷を見つけた。そこに輝夜がいると信じて急降下する、一発で当たったらラッキーだけど……

当たったんだなそれが。屋敷の周りにかぐや姫かぐや姫うるさい連中がいるんだもん。こんな夜遅くなのに熱心なことだ、俺は抜け駆けするけど。

輝夜の顔を一目見るために庭の木にとまって待機する、しばらくすると輝夜と……あれは召使いか？　ともかく二人ほどついている。輝夜は一度こっちの方を見た、ばれたかと思ったけど違うらしい。輝夜は召使いに「しばらく一人にさせて頂戴」と言い、下がらせた。

しばらくするとおもむろにこちらを向いて……

「いるのはわかってるのよ、妖怪さん」

……ばれてましたか。まあとにかく顔くらいは見せないと失礼だな。

「ばれてた？」

縁側に座る輝夜の間の前に跳躍する、まったく驚かれないのは何だろうか？

「あなたの名前は何と言うのかしら、翼のある妖怪さん？」

「猫を被るのをやめてくれたら教えてあげてもいいけど」

輝夜がこんなおしとやかに話すわけがない、これじゃあ二ト姫兼カリスマ兼おてんば娘じゃなくてただの淑女だ。

「あれ、最初っからばれてるんだったら言ってよ。恥かしいじゃない。けどまああんた良く気がついたわね、私が普段淑女のふりしてるのってお爺様とお婆様と帝しか知らないって言うのに。使用人も知ってる人がいるのかわからないのよ」

「それは光栄だ、数少ない秘密の共有者になれたというわけなんだからな」

「まったく、いくら私の立場があるからってこんなおしとやかな淑女を演じさせられる身にもなってみなさいよ、絶対嫌気がさすわよ」
うゝん、それは共感できる気がする。俺だってそんなことしてたらそのうち嫌気……いや、一日と持たずに嫌になるだろう。

「けどまあ気に行っってはいるんだろう？　t……この環境が」

危ない危ない、危うく地上がと言ってしまうところだった。そんなこと言ったら怪しまれるどころじゃない。

「まあそうね……ってなんでいつの間にかあなたの自己紹介から私の愚痴に話が変わってるわけ？」

確かに、いつの間にそんな風に……俺が猫かぶるのやめろって言うたからか。

完全に俺のせいじゃないか、まあそんなこと気にしてる感じもないし、別に問題はないんだろう。

「とにかく名乗っておこうか、俺は紅羽霧、もちろん偽名だ」

「私は蓬萊山輝夜、もうあんたは輝夜でいいわ」

「じゃあ俺は霧でいい。お近づきのしるしだ」

おお、なんだかんだいってもう他人行儀じゃなくなってきた、俺ってもしかしてコミュ力めっちゃある？ 隠れた才能、人とコミュニケーションを取る……自分で言ってる悲しくなってくるからやめよう。

しかし、原作キャラ三人目にも順調に会えたし、いっそのこと永琳が地上に来るまでここにしようかな？ そんで月の使者を追い払うのを手伝って、後々永遠亭で再開なんていうテンプレ的な展開を迎えて……よし、計画はばっちりだ。

けど輝夜って実際に会ってみると結構庶民寄りなお嬢様で、一緒にいても退屈はしなさそうだ。

「ところで霧は何で都に来たの？ 働きに？」

「俺は輝夜に会いにきた、というか働きにつてなんだ？ 俺は妖怪だぞ」

なんで妖怪に向かって都に働きに来たのとかって聞いちゃうかな。

「知らないの？ 今の帝は妖怪にフレンドリーで、人間と共存する意思のある妖怪に都に住む許可を与えてるのよ」

「……俺啞然、何それ？ 聞いたことないよそんなの。ウェルカム妖怪なの、何やってんの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ けど俺にとってはお都合だよ。それって人間から隠れて輝夜と会う必要がないってことだよな？」

「妖怪にしかできない仕事を引き受けたりしてるのよ、結構儲かるらしいわね」

「そりゃあ、妖怪様様なんだろう？」

確かに妖怪にしか

「なんなら私から帝に話つけてあげましょうか？ 霧といると退屈しなさそうだし、私の所で雇ってあげてもいいのよ。ちょうど家庭教師が実家の母が重い病気にかかったって言って里帰りしてるから」

「……話について行けません、けどまあ要するに輝夜は。私の所で雇ってあげるから、なんか面白い話でもして頂戴とか言うんですね？ わかります。」

「けどまあ俺にとってもメリットだらけなんだ。それなら受けてもいいかな、どうせ月の迎えが来るまでなんだし、それまで輝夜と過ごすのもいいかもしれない。」

「とにかく、それならお願いしてもらっていいかな？」

「別にいいわよ、たしか丁度明日帝が来る日だし。お爺様とお婆様

にも話をつけなきゃならないわね」

それは……なんか面倒そうだな。

「お爺様くお婆様くちよつと来てく」

「そんな気軽に……もう少し気を使うとか」

そんな風に紹介される身になってみる。

ほら、なんて言ってる間に来ちゃったじゃん。二人ともなんか拍子抜けしたような何となく諦めたような表情してるけど……よめた、普段からこういうことあるんだろ。

「今度からこの人……じゃない、そういえば何の妖怪なの？」

「吸血鬼」

「今度からこの吸血鬼の人を家庭教師に雇うことにしたから」

率直だねえ、何となくいつもはどんな感じなのかわかる。我儘なんだかなんだか……

「あらそう、だったらこれからよろしく頼みますね。吸血鬼さん」

「何が言いたいのかはわかっています、普段からこんな感じでございます」

……おい。こんなに軽くていいのか？ まあとにかく、名乗っておかなきゃ失礼だ。

「紅羽霧と申します、今後ともよろしくお願いします」

えーと、この後のやり取りはかなりカオスなことになった、けども話はちゃんと通じてるんだよな。そこはさすがと言うべきか。

とにかく、いきなりの申し込みがなんとかってしまうことに驚きを感じながら俺は正式にここに雇われることになった。

ここで働いている人全員に顔を通され、事情を察した人たちにはエールを送られた。

けどまあここではこんなことは日常茶飯事らしい、どんな職場だよここ。

さすがに俺みたいにいきなり雇われるって言うことはないらしいけど、お眼鏡にかなえば自然とここに働き口を用意されるらしい。

「家庭教師とはいっても、俺ができるのはたかが知れてるぞ」

「吸血鬼なんだから長くは生きてるんでしょ、色々昔話してくれるだけでいいのよ」

まあ、適当に俺がまだつけ狙われる前の話でもしておくか、それからここ数百年の話とか。

「じゃあよろしく頼むよ」

「まあ待ちなさい、本当にことが終わるのは帝に話をつけてからなんだから」

確かにそうだ、なんでも本来なら真っ先に帝に話をつけなきゃならないらしい。

今回はかぐや姫権限でどうにかするそうだけど……

「ともかく、私はあなたが気に入ったわ。せいぜい尽くして頂戴ね」

「言われなくてもそうするよ、姫様」

おたがいに冗談のつもりで言ったのはわかるのだろう。二人で笑っていた。

さてと、俺も昼間から起きる練習しなくちゃならない……とはいっても別に大丈夫だろう。

もともと半分は昼型だったのだから。普通に昼間に目が覚めるとかあったもんな。

「そういえばさ、五つの難題とかどうなったの？」

「あああれね、結構面白いことになってるわよ。まずね――」

俺の新天地での生活、かなり幸先のいいスタートを切った。

この調子で幻想郷ができるまで進んでくれたらいいんだけどなあ。

こう思ってたらそうはいかなくなっちゃうのがあれなんだよなあ。

一種のフラグってやつ？　ともかく、これから輝夜の家庭教師か：

…ここにいる人たちは家庭教師と言う名の…とはわかってるらしいし。前の人もそうだったらしい。

まあ気楽にいかせてもらおうかね。

支配者全てが傲慢な理由などない

「いい、もうすぐ帝が来るから。先に私が話しとおすからね」

「じゃあ俺はサイドに控えてれば問題ないんだな？」

「そういうこと」

しかし平安京に住み始めて二日で帝と対面するなんて、結構すごい体験だと思うんだ。

仮にも国で一番偉い人とただ長生きなだけの妖怪風情が会っちゃったりしてなんか後先不安になるな。

「ほら、噂をすればよ」

そう輝夜が言うと、何やら玄関の方から話し声が聞こえる。

ここの召使いの人が俺のことを説明してくれるそうだけど……なにやら笑い声が聞こえてくる。これはいいこととして受け取っているのか？

なんてことを考えている間に、おそらく帝であろう人が入ってきた。黒と金が綺麗に合わさった豪華な着物を着ていて、顔つきは案外普通だが女受けはかなりよさそうだ。

輝夜と俺の顔を見た後。俺に向かって話しかけてきた。

「主が新しくかぐや姫に仕えたという妖怪か」

ふむ、やっぱりこういうところは普通の人なんだな。常識人っぽい

し、期待できそうだ。

「はい、紅羽霧と申します。ただ長生きなだけの吸血鬼であります
が、一応家庭教師と言う名のなんとやらと言う形で奉仕させていた
だいております」

……この時代の挨拶なんか知らないけど、これで会ってるのか不安
だ。

変な風に勘違いされたらどうしようか。

「まあそう畏まるな。どれ、詳しいことは酒の席で互いに腹を割ろ
うじゃないか。宴会の準備は出来ておる。霧殿も庭に出て盃を交わ
し合おうぞ」

うむ、この人もどっか抜けてる人だった。

先が思いやられるような……というか帝がこんな適当な人で大丈夫
なのか？ 平安京。

帝とかぐや姫と一緒に三人で宴会をするということのすごさをわか
っていただけるだろうか？ まず体験できない、というよりは最
早奇跡のレベルであるということとはわかるだろう。

けどまあ、まだ日が昇っているために俺だけ日陰にいるわけだが……
……なんか気まずい。

「ほれ、主も飲まんか」

「では頂戴いたします」

「そんな固くならんでもよい、聞けば二千の時を生きる妖怪だという話ではないか。むしろ畏まるのはこっちと言うものではないのかの？」

えっと、一応四捨五入したら三千になるくらいは生きてますけど…
：それでも帝にため口ってなかなか勇氣あるんじゃない？ 輝夜は普通にやってるけどさ。

「そんなこと気にしなくていいの、別に呼び捨てでもいいんだから」
「その前に名前まだ聞いてないような……」

そういえば来てから直ぐ酒で腹を割ろうとかって言っただけで宴会变成っちゃったから。名前なんて聞いてる暇はなかった。

「そこは素直に帝と呼ばばよい」

「では帝、改めまして「普通に話そうではないか、その方が気楽でいいだろう」では帝、乾杯しましょうか」

俺達の宴会は夜まで続く……

とまあ、宴会が終わるころにはすっかり日が暮れて、俺の時間が来たわけだ。

帝ともすっかり打ち解けてしまった、今ではなんであんなに畏まっていたのかがわからない。普通に友人と話すような感じまで発展してしまった。

聞けば都で働く妖怪は皆そのような感じらしい。帝曰く妖怪が働いてくれているおかげで街が成り立っている部分もあるし、それに妖怪たちの方が長く生きていて、その分知恵も力もある尊ぶべき者たちという考えらしい。

この時代から妖怪と人間の共存が始まっているのは俺的にありがたいことだ。

とはいってもそれは平安京だけらしいが。

そして俺たちは今、雑談タイムとなっている。

「なるほど、山が一つなくなるほどの力とな。だったら一つ頼みがあるのだからいいか？」

「何でしょうか？」

帝直々の頼みなんだ、何か重要なことに変わりはないのだろうか……

「実はの、ここは人間と妖怪が共存できている。けれどもそれを良く思わない妖怪たちもいるだろう。そのせいか妖怪たちを受け入れる制度が出来てから人が襲われることが増えてきているのだ。そのために力のある者たちが自然と必要になってきての。どうだ、陰陽

師の真似事でも初めてはくれるかの」

「……要するに妖怪退治を手伝ってことだろ。まあ引き受けない理由はないな。」

「わかりました、引き受けましょう」

「そうか、助かるな」

「けど私の暇つぶしにもちゃんとつきあってよね」

「今自分で暇つぶしって言ったよね」

とにかく確実に楽しいことになっている、なんだかんだいってこの世界はおもしろい。

帝が帰った後は、二人で話すことになった。

「けどさあ、妖怪が妖怪退治って気分的にはどんな感じなわけ？」

「別に普通だよ、それに俺は元人間だし。噛まれて吸血鬼になったタイプだから天然モノの妖怪ではないからね。一応心は人間のつもり」

「そうだったのね、まあそこら辺の事情については後でみっちり聞いてあげるから覚悟しててね」

なんとも好奇心旺盛なお姫様でいらっしやいますな。

「それでも本当に俺の話せることなんて全然ないぞ」

こっちの世界で大体八百年、そして元の世界でひきこもってなかった年月は二百年くらいだ。実質人生の半分以上をひきこもっていた感じになっちまう。まあそれでもしばらくは時間も稼げるし、今は未来の遊びでも教えてやるか。

「そうだ、俺が昔住んでた世界の遊びでも教えてやるか？」

「昔住んでた？ それってどういうこと？」

ああ、そういえばこの話もしてなかったっけ。

「とりあえず面倒だから後回しにしたい、とりあえずパーっと遊びたい気分なんだけど」

「奇遇ね、私もなのよ」

「だったら決まりだ、ちょっと道具を作るから待っていてくれ」

紫黒の使い道は無限にあるのさ！

とりあえずチェスを教えております、けども一発でルールを飲み込んでしまうのはさすがと言うべきであろう、月の民は皆がこんな感

じなんだろうか？

とりあえず既に勝負は始まっている。初めてなのになかなか上手だから困る。

どちらも色が同じなので若干見づらいが、そこは片方の駒にリボンをつけて見分けている。

それよりも見づらいのはチェス盤本体だ。マス目がわかりづらいが、そこはお互いになんとかやっている。

改めて月の民の頭の良さを再確認するよ、地味にこっちが劣勢だ。

まあここから逆転するのが俺のいつものパターンなんだけど。なんできちやうのかはわからない。

伊達に数百年やってねえよ、最近だって諏訪子と神奈子と一緒にやってたし。腕は鈍っていないはず。

まあ結果的に勝利したわけですけども、しかし輝夜が自滅してくれなかったら俺が負けてたかもしれない。今度から俺の面目との戦いにもなりそうだ。

そしてまあ自然と第二回戦へと向かうわけですね。

「チェックメイト」

「なかなかやるわね、けど次は負けないわよ」

これは俺が負けるまで続くフラグだろうか？　そこで結局最後まで勝ち続けて諦めて……

なんて甘くはないと思うけどさ。

そういえば明日からの予定何にも決まっていんだよな。まあ行き当たりばったりでやっていこうか。

支配者全てが傲慢な理由などない（後書き）

警告「作者は竹取物語に詳しくありません」
どっか間違ってたらごめんなさい。

しかも今回短いというね、長い間空けておきながら。

間があいた理由としては、定山溪に旅行してきました。温泉入ってきました。広かった。

あと初めて、バトンに挑戦してみました。もしよかったらもらってください。

箱入り娘は籠の外をどう見るのか

「ネタバレしてもいい？」

「いいわ、もう全くわかんない」

「注目するべきところは一つだけだよ、なんでKはRがどうやって殺されたのか知ってるの？ 公表されてもいないのにその時は関係者でもないKが知ってるはずないよね？」

「じゃあKが犯人で……わかった、Tがグルなわけね！」

「そういうこと」

……何の話をしてるのかって？ 俺は昨日の夜に、俺はとある推理物の話をしたんだよ。明日の正午までに謎が解けたら新しい遊びを教えてあげるって言って。

けどまあ最終的には分かんなくて俺が種明かししたってこと。けどまあこういう話だけは俺豊富に持つてゐるからなあ。ありがとう2ch、俺がひきこもる前にいろんなネタを学ばせてもらったぜ。

しかしまあ、いつかはネタ切れするだろう。

けど輝夜と帝が親しくなってから約二年が経つという、竹取物語と同じように話が進むならあと一年で月から使者が来るということだ。それまでの間に持っている話を全部出しつくす覚悟で行けばいいだろう。

けどまあ今回も俺が関与したところで歴史は変わらない。だから俺は存分に輝夜の手助けをしてしまっただけだ。

不謹慎だがなんだか楽しみになってくる。

俺が輝夜のところで住み始めてから大きく変わったことが一つある。俺たちは、最早家庭教師と生徒と言う関係ではなくなってきた、互いに親友と言うか、それに近いものとしてお互いを見るようになってきた。

おそらくは俺の出生や今までの人生の話をしたあたりからだろう。けども、輝夜は同情などではなく、俺の生き様を知って俺に近づいた。というような感じで話しかけてくれる。

正直それが一番ありがたい。下手に同情される辛さは、経験者かそれを理解する人にしかわからないんだ。○○だから特別に何々してあげましょうが一番嫌なんだよ。

特別扱いされる側の気持ちがわかってる輝夜は、その点をわきまえていた。おそらくは同じような思いをしてきたのだろう。

結論。こんなようなことを朝から正午までできる俺らの暇人度とはとんでもないと思う。

そして若干太陽が下ってきたころ。いきなり思いもよらないことを輝夜が言ってきた。

「ねえ霧、私町の中を歩き回りたいんだけど」

「いきなり何を言っている」

それは無理な話だろう、かぐや姫だってばれたら大変なことになる。大騒ぎどころではないだろう。

それに今は昼間だ、俺だって輝夜を連れて逃げ切れるかわからない。

「だって私、なんだかんだいって一度も街を自由に歩き回ったことなんてないのよ。霧の話聞いてたら外への好奇心がどんどんくすぐられるじゃないの。それに霧がついてるでしょ？」

「それでも無理なことは無理、それに自分が真昼間からであるいたら騒ぎが起ることくらいわかってるだろう。俺だって昼間から輝夜を抱えて逃げ切れる自信はないぞ」

まあこのくらいで諦めてくれる性格はしていないだろう。俺だってそのくらいわかっている。

まあ誰だってひと月ここで暮らせばわかる。そこで思いもよらない発言をしてきた。

「だったら夜に出歩けばいいじゃない」

……余計に危ないってことわかってますか？

結局、お爺さんお婆さん召使い俺その他で説得したが頑固拒否され。俺が警備役になってしまった。

あまり人がいると目立つから腕が立つ俺を一人だけつけるといふことだ。夜だったら俺k輝夜を連れて逃げられるしな。

「決定ね！」

そして輝夜は夜まで寝ると言って寝室に行ってしまった。

結局一番面倒な役を押し付けられたわけか……

そして夜、輝夜も結構庶民的な服装をしてカモフラージュ。

俺はいつもと変わらない格好で輝夜の周りにつく、その際は俺の方が目立ってしまう気がするがあいにく俺は和服を着て性能が十分出せるほど着慣れていない。

別に奇抜な服装の妖怪も多数いるとのことなので大丈夫だろう。

もしもの時のために、かぐや姫であることの証明書を書いてもらった。

たしかに人間と妖怪が一緒にいるところを見たら、俺のことを知らない陰陽師どもは怪しむであろう。賢明な判断だ。

まあ大抵の陰陽師に知られているくらいには仕事はしているが。な

んでも都を襲ってきた妖怪一味を退治したところ、その中に名の知れた大妖怪が入っていたらしくてそのおかげで俺の評判は鰻登り、一般人でも知っている人は名前ぐらいはわかる程度にまで来た。

「ほら何してるの？ 早く行くわよ！」

「はいはい、あんまりはしゃぎすぎるなよ」

無事に帰ってこれるといいなあ。

大きな通りを輝夜と歩く、後ろ姿は見た目相応の子供のようで少し可愛らしい。これは別に俺がロリコンと言うわけはなく、ただ単に無邪気さと言う意味だ。勘違いするなよ。

「ねえ、あれは何？」

飲み屋はまだ早い……けど宴会とかでは普通に酒飲んでるしなあ。さすがに飲み屋に特攻させるのはまずいだろうし……

「飲み屋だな、金出して皆で酒飲んで騒ぐところだ。まあ宴会場とかと同じ考えでいいだろう」

けどもきちんと言つける。

「ここよりも他のところでも見て回ったらどうだ？ 屋敷の中じやできないような事の方がいいだろ」

「そうね、そうするわ。じゃあ他のところに行きましょう」

若干声が大きいが……まあいいだろう。

さてと、次にお眼鏡にかかるのはどこかな……

輝夜が足を止めたのは、小さな団子屋の前だった。

「ねえ、ここはどんなところ？」

「団子屋だ、まあ名前通りのものだけど……」

というかそれ以外に説明しようがないだろう。

「ちょっと寄って行っている？」

「別にいいけどさ」

勘定は輝夜持ちなんだし自分で決めたらいい、小づかい預かってきてるみたいだし。

まあいざとなれば俺が出してやらないこともないけど……一応陰陽師の真似事して稼いでるわけだし。

輝夜だって注文の仕方くらいはわかる、俺も何か食べようかな。俺も最近屋敷の方で出される料理も食べてたから、和食も食べられるようにはなっている。

主食血液でやってきたためになかなか食べられなかったけどな。

「ほらお嬢ちゃん、あんみつ団子」

「ありがとう」

うん、幸い気がついてはいないようだ。まあかぐや姫って言ったって一般の人たちは毎日見られるような存在ではない。顔を見ただけじゃわからない可能性も十分あり得る。

まあそこは名が有名すぎるのが吉と出たか。

さて、まあとにかく輝夜にもしばらくは子供の時間でもらうとするかね。

静かな水面を波立てる一石は

こういう高い身分で、なかなか外に出られない人っていうのは、やっぱり外に憧れをもつものらしい。

そして外に出るとなんとも嬉しそうな顔をするという。お供しているこちらが幸せになれるような笑顔だ。輝夜もなかなか外に出られないことによほど不満を持っていたと見る。

こうして一通り見て回ったが、少なからず物足りなさそうな感じがするな。まあ幻想郷ができるまでの辛抱だから、そこまで遠く……いや、十分遠いな。あと何年も何年も待たなくちゃならない。

とまあそんなことを輝夜の背中を見ながら思う俺であった。

これから屋敷に帰るところである、特に問題も起きず、かぐや姫だとばれることもなく、お忍び旅行としては大成功と言う結果「鬼だ！ 鬼が来たぞー！」というわけにはいかなかったらしい。

鬼が来た？ わざわざこんな時間に攻めてきたってこと？ そんな夜襲なんてしないで白昼堂々襲ってきそうだけどなあ、鬼は。夜襲なんて卑怯マネなんかしない！ とかいつて。

ともかく、俺も陰陽師の真似事をしているんだし。行かないわけにはいかない。

ともかく、いそいで輝夜を送ってしまおう。

「ねえ霧、鬼が来たって言うけどどうするの？」

「輝夜を屋敷まで急いで送って直ぐにいくよ」

そういうと俺は輝夜を抱きかかえて……。

「えっ、ちよつとなんなのよ！」

そのまま飛んだ。

はじめのうちは輝夜も嫌がっていたけどだん景色を楽しむようになってきた。

これは近いうちに空を飛びたいって言いだすかも知れない、覚悟しておかないとな。まあ俺のできる限りのことは教えてやるが……俺は翼で飛んでるしなあ。

「空からの眺めはどうだ？」

「最高ね、私も自分で飛んでみたい」

「そうか、けどももう屋敷についたぞ。ここでお別れだ」

「そう、残念ね」

俺は地面に降り、ちょうど玄関にいた召使いに輝夜を預ける。

召使いの人は面喰ってるが輝夜が説明するだろう。

さて、俺はどこに行けばいいのかな？　とりあえず帝のところに行けばどこで何が起きてるのかわかるだろうけど……

そう思うや否や、俺は帝の屋敷へと飛び立った。

——帝のところの陰陽師知り合いに話を聞いたところ、都の南門から堂々と突入してきて、こちらへ向かってきているらしい。なかなか力が強く、いまから俺を呼びに来る予定だったそうだ。これは好都合だな。

ともかく俺は、南門の方へと向かうことにする。

そして、その鬼を見つけた時にはもう既に門と帝の屋敷のちょうど真ん中あたりであった。

なるほど、なかなか力の強い鬼だな、これなら陰陽師たちが苦戦しているのもわかる気がする。ざっと千年は生きているだろう。それくらいの妖力が伝わってくる。

さて、こんかいは家屋の被害まで気を使ってる余裕はあるかな？

ともかくやるしかない、俺はその鬼に向かって急降下し始めた。

「まだ増援はきてくれぬのか！」

「早くしてくれ！ 救護班はこっちもたのむ！」

現状はひどい有様だった。破魔矢やお札などが全く効果がなく、一方的にこちらが数を減らされている、これではほとんどの陰陽師はいるだけ無駄であろう、むしろ遠くに行ってもらって、他の仕事をしてもらった方が助かる。

ともかく、俺が行かなければ話にならないだろう。少なくとも俺だって年齢の分の力はあるつもりだ。それ相応の戦いはできる。それに今は夜だ、夜の吸血鬼を舐めてもらっては困る。

「おい、大丈夫か？」

吹っ飛ばされてきた陰陽師の一人に声をかける、俺はこいつを知らないがこいつは俺を知っているらしい。俺も有名人になったもんだ。

「霧さんじゃないですか、お願いです、あの鬼を止めて下さい」

「わかってる、そのためにここに来たんだから。他の陰陽師にも伝えてくれ、他の陰陽師たちは撤退、その後住民たちの避難の手助けに専念、帝やかぐや姫も安全な所へ。攻撃から守り切るくらいなら十分にできるはずだ」

伝えるべきことは伝えた。これで俺の心配事はなくなる。

「撤収――――」

他の陰陽師たちが、俺の姿を確認した後、納得したような表情にな

って四方八方に逃げ去っていく。そんなに俺が戦う時にそばにいるのが怖いか？ たしかに半径三十メートルは危険区域になるけどさ。

ともかく、鬼の方も俺に目をつけたらしい。ここからは真剣勝負だ。

「なんだ貴様は、妖怪ごときが俺に勝てるんでも思ってるのか？」

「思ってるさ、だって俺はただの妖怪じゃないんだから」

？紫黒———？

俺は紫黒を大剣にする、おそらく鬼の力と打ち合うにはこれくらいは必要だろう。いくら紫黒が頑丈でもレイピアで鬼の拳は受け止められない。念には念をだ。

「夜の帝王の力を見せてやる」

「おもしろいじゃねえか、かかってこいよ。さっさとぶっ飛ばしてあんたらの帝んとこまでいかせてもらうぜ」

やはり狙いは帝、今立てた俺の仮説は人間と妖怪の共存に異議を唱える者。おそらく単騎出陣してきたのだろう。

鬼が何か策を立てるほど小作なマネをするほど落ちぶれていないことに駆けるしかない。まあ協力者に他の妖怪がいたら話は違うがな。

ともかく、俺のすることは目の前の鬼を倒すことだけ。

「おっと、そういえば名前を聞いてなかったな、俺は金津 力道。これから帝をぶっ殺して都の人間を襲わないなんてほざいてる鬼た

ちを変える男さ」

「なるほど、俺は紅羽霧。お前をぶっ倒して都の平穏を取り戻す男だ！」

無駄にかつこよく決めてみたけど、これで負けたりしたら恥ずかしいよな……

まあ気を引き締めていこう。

「こっちからいくぜ——」

拳と大剣がぶつかりあった。

力はお互いに拮抗している、さすが鬼だ。年齢差をものともしない荒々しさがある。

俺だって小細工に関しては負けるはずがないが、というか力以外は負けたくない。俺のプライド的に。まあだったら力でも勝って話だが……

二回三回と打ち合っているうちに、だんだんこっちが優勢になってきた。けれどもさすがは鬼、なかなか決め手が入るほどにならない。これは長くなりそうだ。

そしていったん間合いをとった、間の距離は10mほど。そしてお互いに感じ取った。？相手は本気で終わらにかかると

?

静かな水面を波立てる一石は（後書き）

新年あけましておめでとうございます。

いやー今回の年越しはメイプルストーリーでした。
楓鯖はきのこ神社であけおめいぷるです。

新年一番の作品は二千字くらいでみじかいですけど……まあ許してください。

また今年一年よろしく願います。

力と力はそれぞれ違うけれども同じもの

奴の決め手がわからない。それが一番怖いところである。

もちろん向こう側も俺の決め手を知るはずもないけど、お互いに手の内を知らない戦は何が起こるかわからない。それだけの不安定さがあるものだ。

俺の霧の攻撃はもしかすると知られているかもしれないが、陰陽師の真似事を初めてからは炎は使っていない。おそらくは裏をかくことが出来るだろう。

この作戦さえもが相手の考えの中にあるというのなら話は別だが。

とにかく俺は手に力を入れる、一触即発の空間は今すぐにでも張裂けてしまいうさだ。

そのくらいのプレッシャーに満ち溢れている。

すると、遠くから声が聞こえてきた。

「霧殿！ 一般市民全員の避難が完了しました」

……誰だか知らないが助かる、その言葉を待っていたんだ。

物が壊れるのは仕方がないとしても、人が死ぬのは目覚めが悪い。

おそらく俺に全力で戦えるようにと言う帝か同僚たちからの配慮だろう。さすがだ、俺の性格をわかっているじゃないか。

とにかく、俺はこうして全力を出すことができるわけだ。

「これで心配事はなくなった、存分に力を出し合おうじゃないか」

俺は一步踏み込むと、それがお互い動きだす合図となった。

「燃え尽きろ……！」

俺の紫黒な炎があたり一面を燃やしつくす。戦場は確実に姿を変える。

そして炎は全てを飲み込む。

「フンッ！ 俺はこのくらいでくたばるほどヤワじゃないんでなあ
！」

炎の中を突っ切ってこちらに一直線に走ってくる力道、そして俺に向かつて振りおろしてきた拳を後ろに避ける。

するとどうだろう。そのまま振り切られて地面に突き刺さった拳は、大きなクレーターを作り出した。直径一メートルはあるのではないだろうか？ ともかくあの力があるの決め手とやらなんだろう。確かに当たればただでは済まないはずだ。

俺は槍を作り出し、ひと突きにしようとしたが。紫黒を軽々と受け止めた力道は槍をつかむ俺ごと遠くへ投げ飛ばそうとした。

俺は慌てて槍を消し、飛んで距離を取る。空を飛んでもいいが、その場合純粹な弾幕戦になってしまったために被害がとんでもないことになるってしまう。

「なかなかやるじゃん、そんだけ力があるんならかなり鬼の中でも上の方だろ」

「フン、どうだかな。あんな臆病者たちの頂点に立とうがなんとも嬉しくないさ」

短い言葉が交わされる、それは気休めでも何でも無い。

お互いに探りを入れるというわけでもない、単純に言葉の掛け合いだった。この勝負を楽しんでいるお互いの言葉の掛け合いであった。

「燃やし尽くせ！ 全部飲み込め！」

俺は炎を力道に向けて集める、摂氏何千度の炎なんだろうか？ 自分ではわからないがさうとう暑いらしい。これを食らった妖怪どもが証言してくれた。

まあ、これでも倒せるなんて甘い考えは持っていない。現に持つだけ無駄だった。

炎を払い飛ばしながら現れたそいつは、やけどを負いながらも平然としていた。

「こりゃあ炎はきかないな」

俺は炎をしまい、霧を使うことにした。破壊力だけなら炎の比ではない。むしろこれで壊せないものは見たことがないくらいだ。

俺の力の集大成……とは違う。むしろ全ての基本であり、頂点に立つ力。

それが俺の霧の力だった。吸血鬼になって手に入れた力だった。

力道の拳を右へ左へアクロバットのように避けて行く、吸血鬼の身体能力だからこそ出る技ではあるが、自分の種族の特権を使わないのは損と言うものであろう。

そして俺は身体に霧をまとう。俺の破壊の力を存分に振るうために。

「行くぜ鬼！」

「来いよ吸血鬼！」

俺の一発目は霧の津波だ！

地面を這うように、それは流れるという表現が一番ふさわしい破壊の霧、まさにそれは津波のように、広い大通りを流れて行く、地面を削り、家までも巻き込む。

それでも鬼は立っていた、全身に傷を作りながらも立っていた。腕を胸の前で交差し、懸命に踏ん張っている。

鬼は破壊の津波を耐えきった、霧によって蝕まれながらも耐えきった。全身にできた傷、それは勲章だった。

「これで終わリなわけがないよなあ」

「もちろんだ、これからもっと楽しくなるぜ」

吸血鬼は悟った、こいつは強い、神奈子を除けば一番強いだろう。人間の作り出した兵器よりも、都を襲おうとした大妖怪たちよりも強い。

そして、自分は今極限の世界にいると。

力道は崩れ去った家のところに、とても優雅に、鬼から感じられる荒々しさなどは何も感じない。けれども力強い跳躍で飛ぶと。一番大きな材木をつかんだ。

「これから次元が違うぜ」

「わかってる、俺たちの戦いをそこまで軽視するほど愚かではないさ」

「そうか、それなら安心だ」

力道は材木を大きく横になぎ、横一線に殴りつけた。そこで起こった風は、周りのものをさらに崩壊させた。

霧はそれを空へと回避し、霧を使って足元を狙う。狙いは目くらまし、一瞬でも姿を完全に隠せれば勝機は見えてくるけれども……そうはいかない。

材木は霧に向かって投げられた、霧は投げられた材木を使って空中で跳躍するとまだ大勢を立て直していない力道の背後を取り、霧よる攻撃を繰り出した。

力道は振り返るや否やそれを腕を振り払うことで打ち消し、逆に特

攻を仕掛ける。そしてそれは霧のもとへ一步届かず空へと空振りに終わる。

霧は後ろの空に向かって翼を広げて飛び立った。そして全身全霊をかけた霧の砲撃を打ち出した。それを迎え撃つ力道は自らが跳躍し、拳を掲げて真っ向からぶつかり合う。やはり強いものには正面からぶつかり合う鬼の執念は残っているのであろうか？

そしてお互いがぶつかりあった、それはすさまじい爆発と衝撃を生み出した。そして勝者は霧、力道は力負けして飛ばされる。そこに追い打ち攻撃が掛けられる。

「投げ槍！」

紫黒を投げ槍に変えて投擲する、黒く紫色の槍はまるで流星のようだった。

それは鬼の体にぶつかるとはじけ飛んだ。後に残されたのは胸板が真っ赤に染まった鬼だった。けれども鬼は地面にしっかりと立っていた。

「なかなか……やるじゃねえか」

力強く大地を踏みしめる、その顔にはむき出しの闘志が残されていた。

お互いに走り出す。鬼は右フックを繰り出す、吸血鬼はそのわきの下をくぐり、体をひねって鬼の脇腹に自らの拳を叩きこむ。どうして自らの得手である武器を使わなかったのか、それは誰もわからない。

勝負がついたのは一瞬だった、吸血鬼の腕力によって繰り出された拳は鬼の骨を砕き、内臓を潰した。

鮮血が迸る、顔は既に返り血を浴びて赤い模様が出来ていた。

鬼は口から血を噴き出した、おそらく内臓が破裂したために血が逆流してきたのだろう。

そして吸血鬼は、自分の左拳の骨が粉々に砕けているのを感じた、これが奴の、鬼としての、力道の最後まであきらめない強さである。それは吸血鬼の治癒力の前に最早修復が始まり、明日明後日には元通りになってしまうようなものだったとしてもだ。

それが鬼と吸血鬼がこの場所で戦った証なのだから。

崩れ落ちた鬼を吸血鬼はそつとささえた、霧は最期に一言声をかけた。

「こんなに強いとは思わなかったよ」

返事はすでになかった。

「さてと、とりあえず仕事は完了したと伝えなきゃいけないな。どこに避難してるんだらうか？」

おそらく騒音がやんだことで戦闘終了は理解したはずだ、陰陽師の誰かが来てくれるだろう。どちらが勝ったのか見極めなければなら
ないのだから。

さて、それまで休ませてもらおうか。実はくたくたなんだよ。本当に疲れて死にそうと言う比喻が当てはまるくらいにね。

力と力はそれぞれ違うけれども同じもの（後書き）

総合評価100点越えました、ありがとうございます！

目指せ1000点です。これからもよろしくお願ひいたします。

戦闘シーン、実はこの戦いは主人公戦ってまともに決着付けたことないじゃん。

という俺のふとした思いつきから始まりました。

グロシーンとかどこまでいいのか分からないので最初は控えめに、できれば感想の方でどんなところまでOKなのか教えていただけると助かります。

まあこれからバトルはありますしね、自分としてはわくわくする展開を考えたいと思います。

形の違う鬼の下で取り決めは神聖な

あれだけ大きな戦いも、終わりはあっけなかった。

偵察の陰陽師が俺を発見し、そのあとはすぐに復興が始まった。派手に壊したからかなり大変らしいがあんな奴を被害なしで倒せるなんて馬鹿らしい見込みは皆していなかったらしい。まあ要するに正当な代償だという風に片づけられた。

力道の埋葬は鬼たちに任せたらしい。今日改めて代表が今後について話し合いに来るそうだ。おそらくは……鬼神とやらが来ることになるのだろうか？

俺は一応鬼を殺した張本人なために立ち会うことになるが……さすがに今回は正当防衛だろう。俺が止めなかったら確実に死人が出ていたはずだ。

それに今の俺には戦う力が残っているかどうか怪しい。左手の骨は一応治ったものの手首から先はだらりとぶら下がったままだ。体中の血が不足しているし万全ではない。

まあ俺の霧や炎は血を代償にしているわけだから、軽く一リットル消費したということだ。

久しぶりに人の血摂取しました、快く承諾して下さった帝の側近の人には本当に感謝している。もちろん皿に移してからだぞ。直接飲むのはさすがに嫌だろうし。

「んで、もうすぐ鬼の代表者がくるんだな？」

「もう来てもおかしくはないなあ、まあ争いごとにならないことを祈っておくかの」

俺だって御免だ。この状態で戦えって言われたら迷わず逃亡するぜ。戦う前から満身創痍なんだから。最初からHPゼロで戦うほど愚かではない。決して。

と、そこへ走ってきたのは門番だった。たしか……いつも門の右側に立ってる方。

「鬼の方がお見えになりました」

「よろしい、通せ」

こういうときは威厳がある帝、やっぱり貫禄は伊達じゃあない。まあこうでもなきやここまで大きな街を一つにまとめるのは不可能だとは思うんだが。

とにかく帝も鬼神とは顔見知りらしいし、そう固くなることはないらしい。

そしてやってきたのは、予想通り鬼神であった。

そして部屋に入ってくると深々と頭を下げた。短くて、おそらくは三センチ程度しかないであろうほぼ三角形で表せるほどの小さく可愛らしい角が印象的である。

「本日は人間と鬼との間の……」

ん？　ずいぶんと礼儀正しいじゃないか。

鬼ってみんな豪快でこういう時も豪快に第一声を大声で放ってくる奴らばかりだと思ったが。どうやら違うらしい。

「そんなに改めなくてもよからう、いつも通りの主でないとかえってやりづらい」

「そう、だったらいつも通り行かせてもらおうよ。早速本題に入るけどあんたの横の奴が例の力道を殺った奴だね？」

……………これってどっちかと言うと帝のせいだよな？

まあやっぱり鬼って言うのはいつでも堂々としてるもんなのか。

ともかく質問に答えないといけまい。

「俺が力道を殺した、この場合は正当防衛を主張させてもらうが」
すると鬼神は突然改めてお辞儀をした。

「力道については、あまり大きな声で言えないが正直感謝してるんだ。あいつは過激派な鬼でなあ、人間と慣れ合う鬼を実際に殺して

いる。実を言うと奴はもう鬼のテリトリーから永久追放されているから精密に言えば我々鬼はこの件には関係がない。ただ人間と鬼の間のいざこざだ」

そして一息つくとまた話し始めた。

「だがまあ私たちとしてもこちらの損害を恐れて処罰を下さなかったのも事実、それに関してはこうして頭を下げよう」

……正直なんとなくは可能性の中に入ってもおかしくはない事実である。

単身鬼が都に乗り込んでくる。それについて考えられるのは、仲間がいないことが考えられるからな。

仲間がいればそいつらも引き連れてやってくるだろう。なかなか確信の持てない推測だったが。これですべてが明らかになった。

「まあ都の被害の方は小さくもないが誰も死んではおらん。どうだ、霧にはは少し悪いかもしれんがお互いこの件は忘れてしまおうではないか」

「なんだ、俺は別にそんなこと気にしないぞ。それよりも鬼との関係が崩れる方が大問題だ」

そういつてくれるとありがたい、と帝は言葉を返した。そして鬼神も。

「そういつてくれると助かる。さてここからは別件なんだが、力道を倒す強者のじつりよくをみていたいという連中がうるさくてな、

どうだ一つ鬼の代表と戦ってはくれぬかのう？」

……なにこのフラグ？

「なるほど、確かに戦いが好きな鬼の言いそうなことだ。どうだ霧、一つ受けてやったらどうだ？ まあこんなこと頼むのも悪いがこれも一種の接待というものの、ひとつ人間代表でやってみてはくれぬだろうか？」

うん、これは死亡フラグと言うのかな？

けどなあ……ここで受けなきゃ人間は臆病ものだのなんだのいろいろ言われることになるし……

「わかりました、受けましょう。ただしそちらも万全な状態の俺と戦いたいでしょうし勝負は一週間後。俺の傷が癒えてから。でいいですね？」

「よからう、こちらの代表は伊吹萃香。鬼の四天王の一人でなかなかの曲者だぞ」

なるほど、相手は萃香なわけか。原作キャラとのご対面なわけか。しかし厄介な相手になるんだろなあ、主に能力とか能力とか「密と疎を操る程度の能力」とか能力みたいなのが。

「そうだ、主名はなんと申す？」

「紅羽霧です」

すると鬼神は高らかと宣言し始めた。

「では勝負は一週間後の正午、場所は後からこちらが指定する。紅羽霧と伊吹萃香との決闘は私の名において、かなひめ おうか奏姫桜花の名の下に置いて絶対不可侵にて神聖なる下でお粉会われると誓おう」

「じゃあこちら人間代表がそちら鬼のお眼鏡にかなうものだと言束させてもらおうかの」

こうして取り決めが決められた。

「すまないな、何度も何度も」

「いや、こうして都に居場所を作ってもらえてるだけでありがたいんですから、むしろ礼を言う立場なのはこちらだろう」

それに原作キャラに会ういい機会だし、たぶん勇儀も来るんだろうし。

けども鬼神の名前格好良かったな、桜花だって桜花。俺の霧なんてちゃっつい名字何かとは全然違う。

「さてと、そろそろ輝夜の屋敷に顔見せないと怒られそうだな。じゃあ何かあったら教えて」

「うむ、おそらくは決闘の場所が決まればなにかしらの手段で伝えよう。それではな」

こうして俺は輝夜の屋敷へと向かう。おそらく何か言われるだろうけども。まあ覚悟しておくか。

想い神は思いの矛盾の中で何に辿り着くのか

鬼との勝負はあと四日に迫っていた。

そして鬼からは場所の決定を知らせる使者がきた。

俺は鬼のことを全面的に信頼している、鬼が正々堂々と俺と対等に勝負ができるステージを選択してくるというのは予想出来ていた。そして指定されたのは洞窟だった。

鬼が集会のために使用している洞窟をそのまま使用するらしい、広さはここの屋敷が二つほどすっぽり入るとか。それならば申し分ない。

天井は大体四十メートルほどでドーム状、なんで天然モノらしい洞窟がそんな都合のいい形なのかは聞かないでおくが俺にとっては非常に有利になることは間違いないだろう。

場所は帝が知っているとのこと、すでに一回足を踏み入れているそうだ。

ちなみにそのうち広くするつもりだったのである程度の破壊はOKとのこと、それはどっちにとってもありがたいルールだろう。

鬼だけでなく人間も見に来るらしい、おそらく正午に行う理由の一番はこれであろう。夜活発になった妖怪どもの襲撃から人間を守りぬくよりも、昼間のうちに済ましてしまおうという魂胆だ。

まあそれについては俺も納得だ、昼間なら普通の妖怪だってそう大胆な行動は起こすまい、すなわち俺はこの条件に文句はない。

「じゃあ俺からは承諾という形でお願いできるか？」

「もちろん、では四日後にそこでまた会おう」

そういうと鬼は（そういえば名前聞いてない）大通りへと走って行ってしまった。玄関で立ち話したらすぐ帰るなんて、案外せっちな奴だな。あがってお茶でも飲んでけばいいのに。

俺の現状はだ、もう以前と変わらない動きはできるようになってきている。けどもさすがに手首から先が全て粉碎したために治った今でも違和感は多少ある。

しかしすげえな吸血鬼の回復力、これから何度お世話になるのだろうか。

おそらく四日後にお世話になるだろうが。

というか俺って普通の人間の生命力なら何十回も死んでるんだよね、こういう点ではもうすっかり吸血鬼に染まってるわけか。まあいつまでも人間と同じように、と言うわけにはいかないけども……少し寂しいというかなんというか。

「霧どこにいろの？」

「玄関、今行くから待ってろ」

うちの姫様はこんな時でもマイペースだけど。

「そういえば今度戦う鬼って有名な鬼なんですよ？」

「鬼の四天王の伊吹萃香だ、厄介な能力もちだけど破壊力だったら俺だって負けないよ」

そう、その気になれば都だって更地にできるんだから。

鬼だってさすがにそこまでするとなると大変だろう、その点では俺の方が有利だけだな……いや、鬼と対戦するにあたって破壊力の優勢は大きなアドバンテージだ、これは戦略の幅が広がるかもしれない。まあもしかすると萃香の本気がとんでもないっていう可能性も入れておこうか。

結論、どっちの場合も考えとく。

「輝夜だって一応戦う力はあるだろ、たぶん都の人間全てのイメージジヒっくり返すと思うけど」

「そりゃあ私だって普通の人間じゃないしね、けどまあそれは暇つぶしのネタがなくなったら考えましようか。ほら、今日はどんな話をしてくれるの？」

守屋神社は今日も平和である、けれども住人の一人は大きな悩みを抱えているのであるが……

「（これじゃあ長く持つてあと一年ちよい、神奈子には気づかれていないとは思うけどどうしようかねえ）」

諏訪子は自分の信仰が少なくなり、生活に必要な最低限な労力を賄うことも厳しくなってきたと悟っていた。そしてあと一年もすれば自分は眠りに就くことになるだろうと。

「今帰ったよ諏訪子」

「ああ神奈子。今日の成果も上々みたいだね」

最近布教活動が活発になってきている、なんとかして守屋神社の参拝客を増やすことに必死なわけだ。

けどそれは私の信仰の回復に直接つながったりはしない、信仰されているのはあくまで神奈子なんだから。

「なあ諏訪子、単刀直入に聞くけどもって後どんくらい？」

「（！）なんで？ 神奈子が気がついてるって言うのかい？」 そんなことないよ、まだ眠りに就くなんて早すぎるよ」

「誰もあんたがどのくらい起きてられるかなんて聞いてないよ。やつぱりそうなんだね？」

……やられた。

「第一気がつかないわけないだろ、一緒に暮らしてるわけなんだから感じ取れる神力減ってるのくらいすぐにわかる。で、それを踏まえて聞くけどあとどんくらいなんだい？」

はあ、そこまではれてるのなら仕方がないかな、もう本当のことを言うしかないだろうね。

「もってあと一年、それ以上は保障できないよ」

神奈子がとっても複雑な顔してる、たぶん考えてることは一つだけだろうけど。

「そんなのが自分でわかってて霧を見送ったのかい？」

「そうさ、霧には私って言うおもりを背負ってほしくはないからね」

私のせい霧が重荷を背負うって言うのは嫌だ、だから止めなかった。これからだってそうだ、すべてが終わってから事実を知ればいい。そうすれば苦しむのは私だけで済む。

「あんたの気持ちは何となくわかるよ。けども、私はどうしようもなくなれば勝手に進めるからね」

……はあ。どうしたらいいんだろう。わかんないよ。

「(どうしようもなくなったら呼び戻すしかないのかな)」

神奈子は一人考える、どちらか救うことができる方法を。
そして思いつく、一つだけあった望みを。

「(霧の能力で生み出せる？力？の中に、もし神力が入っているとしたら?)」

それならば諏訪子の力を一時的に全盛期のころまで戻せる、そうしてその間に？守屋神社には神が二人いる？という噂を広げて、どちらとも進行すれば何かしらの恩恵があると思わせられれば、そうすれば信仰は諏訪子にも……

そんなうまく行くなんてことは思っていない。けれども少しでも効果があれば変わるかも知れない。

そうすれば……………また元通りになれるかもしれない。

元通り？　いいやちがう、ただどちらも妥協できる。

妥協？　それでいいのかはわからない。ただお互いの思いが。

お互いの思い？　通じあえないとわかっているのに、霧が諏訪子を中心に愛しているかは本人しかわからない。

自分はいったいどうしたらいいのだろう？　時が全てを解決してくれるのだろうか？

「どうすれば解決になるんだろうねえ？」

自分に向けられる恋心、というのに気がつかない人は意外と多い。
片思いというのは意外と多いものなのだ。思いに気付かず、ただ時
が流れて行くというのは意外と多いのだ。思いを向けられた彼は意
外に気がつかないのだ。そして月日は過ぎ去っていくのだ。

そして迎えた鬼との決闘の日、俺は案内役の鬼に連れられて山道を
歩く。

輝夜や帝も立会人にいるらしいし格好悪いところは見せられない。
日傘を握る手に少しだけ力が入る。

この日のために完全なる昼夜逆転生活、とはいっても人間にとって

は普通なんだけど。

とにかく、この日のために夜に暴れないで我慢してきたんだ。その分のつけは払わせてもらう。

「ほら、ここが集会所だ」

その言葉で意識が目の前に戻る、そして細い洞窟の道をくぐった先には本当に広い、ただ火がともされて全体がどこか温かみのある光で包まれているとても大きな空間に出た。

中央にはまるでラスボスだとしても言わんばかりに萃香が立っていた。いや、ゲームではラスボスか。

ともかく威厳たっぷりに仁王立ちしていた。

なんか萃香ってノンカリスマなイメージあったんだけど全然違う。

ただ幼女が仁王立ちしているだけなのになんだかプレッシャーを感じるんだから。

「一応立会人がそろうまで待っていてくれ、人間と鬼の代表同士の真剣勝負だから見たがる人間も多いんだ」

「わかった、じゃあそれまでは適当にしてるよ」

俺はそういうと萃香の方に向かって歩き出した、そして十メートルほど前で立ち止まる。

「今日はよろしくな、お互い頑張ろうじゃないか」

「あんたが力道を倒したって言う人間かい？　その強さをどんどんぶつけてきてくれると嬉しいんだけどねえ」

俺だってもうけがの方も治って万全な状態なんだ、せいぜいいい勝負ができるだろうさ。

さてと、まだ時間があるし少し話でもしようかな？

壮絶で大規模で真っ直ぐな破壊の力

鬼と戦うにあたって気をつけるべきこと、それは前回の戦いから学んでいる。

まずはあの馬鹿力、あのクレーターを作り出す体術はすさまじい威力がある、あれは一発でKOされてもおかしくはない。

二つ目はあの防御力、直接殴れば吸血鬼の拳でさえも跳ね返すあの硬さは尋常ではない。能力を当てるしかないだろうが……炎が直接聞かない可能性もあるために霧でしか攻めることができない。

しかしこちらには飛行能力という大きなアドバンテージがある、しかしこれは向こうの能力を考えるとあまり意味がないだろう、となるとあくまで手段の一つでしかない、決め手にはならない。

やはり、最終的にものを言うのは俺の火力だ。こう悩んでおいても結局そこにたどり着く。

一筋縄ではいかない勝負を引き受けたもんだ、まったく。

なんか帝からふんだくってやろうかな。けど金は陰陽師の真似事で腐るほど……いやこの場合は錆びるほど入ってきている。

それこそ庶民には手の届かないような額が。

話がそれたが早い話、俺の全力であの防御を打ち破れるかってことだ。

まあ破壊力なら何度も言うが自信はある、おそらく通じないことはないだろうが……

「あんた……霧とか言ったっけ。今年齢はどんくらいなんだい？」

「なんだいきなり……まあざっと2800年くらいかな」

俺だって端数は覚えていない。しかし何でいきなりこんなことを聞くんだ？

「なるほどねえ、そんだけ生きてるんならその強さも納得がいくかな。まあ今日はその力を存分に見せてほしいもんだね」

「そういうことか、まあ心配しなくても全力は出すよ」

と、そこへ俺にとってのメインゲスト？ が現れた。

「霧く、せっかく私が見にきてあげたんだから絶対に勝ちなさいよ」

「輝夜か、まあせいぜい期待にこたえんとするよ」

さつきからギャラリーの様子を見ているんだが、もはや雰囲気がお祭り気分の件についてどう考えようか。

戦う二人だけが真剣になって後の観衆は野次飛ばすのか。それはそれでお祭りみたいでいいかもしれないけども、そんな雰囲気の中で事故って死んだりしたら洒落にならない。

まあ俺があっさり負けたらかつこ悪いので頑張っただけで対処するけども。

……と、そこに帝と桜花がやってきた。話を聞いてみるとどうやら人間側の代表の一人でもある帝を迎えに行っていたらしい。

これで俺の知る限りのゲストはそろったな？ けどこんな大事にす

る必要性をあまり感じないのは俺だけであろうか？ 帝曰く一種の祭りのようなものだと思ってくれればいいとは言われたけどもなあ。本当に祭りでこんな殴り合いする俺らって何なんだろうとか考えてしまう。

「さて、ギャラリーは全員集まったってさ」

そう言われて気が付くと入口のところには既にたくさんの鬼と何人かの人間が集まっていた。輝夜や帝も含まれる。

何重にも張られた結界が俺達のことをどんな風に思っているのかを物がっている。

まるで要注意人物みたいな扱いだ。

「さて、じゃあそろそろ始めようじゃないか」

「まあ……そうだな、死なないように気をつけようぜ」

何とも微妙な雰囲気が始まるんだなあ、もうチョイなんとかならないのか？ 作者さんよお。

俺は周りに炎を出した。結界ぶち破らないか心配だ。

なんだかんだいってお互いに真剣な顔つきになったときにはギャラリも静まり返った。俺だってまっすぐに萃香を見つめている、先に手を出すのはどちらだ？ 先手は俺に譲る気か？

なかなか幕開けが来ないのもさびしいので俺が先に仕掛けることにした。岩の地面を伝う炎が萃香を襲う、どのように対処するか見てみるとするか。

萃香は炎を一瞬だけじっと見つめると、中央を突っ切るような馬鹿な真似はせずに一歩後ろに下がった。

その隙について俺が飛びかかるが、萃香は紫黒の大剣を受け流し、俺に蹴りを入れてくる。

俺はそれを紫黒で受けとめ、その勢いで遠くに着地する。

萃香は大きく跳躍して炎を飛び越え、再び燃え盛る地面をはさんで向かい合うこととなった。

俺は炎による牽制だけではこちらがぼろを出すと思い、霧による攻撃を行うことにした。

ただ霧をぶつけるだけではだめだろう、そこで思い付いたのがこの作戦だ……

俺は天井に霧を当てて、大規模な落盤を起こした、そして落ちてくる無数の瓦礫で萃香を埋め尽くす。もちろんその程度で倒せるとは思っていない。そこで無防備になった萃香に霧をけしかけて不意を突く作戦だ。

落ちてくる瓦礫、萃香の意表について姿を覆い尽くすことには成功した。

そして破壊の霧にそれごと壊させる。

すさまじい爆音がした、そして砂煙が消えたそこには……

萃香の姿はいなかった。

なんでだ？ 俺は少し考え、そして気がついた。

そして萃香の意図に気がついた時には手遅れだった。そう、俺は萃香の能力でどんなことができるのかわかっていたはずなのに……

真横からの萃香の蹴りに気がつけたのは最早奇跡だろう。

萃香は霧になって俺の攻撃を回避し、俺本体をたたくつもりだった、そしてその作戦はほぼ成功したのだ。

紫黒で速効作り出した大剣で受け止めるが、そんなもので鬼の力を相殺できるはずがない。

俺はあっけなく吹っ飛ばされた。

このままでは壁に叩きつけられて気絶して終わりだろう、俺は持っていた大剣を地面に突き立てた。

面が広い方で一気に止めようとしたのに地面を削ってガリガリと音を立てて移動するのはさすが鬼と言うべきだろう。しかし俺を倒すには一歩足りなかった。

追撃に来ていた萃香は、この結果に表情を歪ませる。おそらく反撃に対する対処など考えないで止めを刺すつもりだったのだろう。

そしてそんな状況で俺の攻撃を受け止められるはずがない。

「終わりだあああああああつ！」

俺の全力の叫びとともに放たれた霧は、俺の左手の甲全体から血がにじみ出て、それだけではなく左手全体のいたるところに亀裂が走った。正直かなり痛い。

そしてそんなになるまで力を振り絞った俺の全力を受けた萃香はどうなるか？ 亜音速で壁に叩きつけられる羽目になる。

……やばい、これ死んでもおかしくない威力だ。

そして全てがスローに映る中、萃香の体が霧の中少しだけ見える。

あのまま壁にぶつかれば本当に洒落にならないぞ、もう既に全身から失血してるに違いない。

すると、突然萃香の体がぶれた、そして消えた。ほとんどの人は見えていないはずだ、何が起きたのかもわからないだろう。

しかし俺にははっきりと見えた。萃香を霧の中から攫い出した人影を、一本角のシルエットを。

そしてついに壁を貫通し、外の景色が見えるほどになった、新しく俺の手によって作り出された通り道の脇に足をおろした。

「萃香はもう戦えない、あんたの勝ちだよ」

星熊勇儀だ。萃香の身が危ないと悟り、救い出したのは。あるいみ俺らよりも化け物なんじゃあないか？

「ともかく、助かったよ。このまままだ行けばただでは済まなかっただろうからな」

「なあに、これくらいお安い御用さ。同族が下手したら死ぬかもしれない状況で黙って傍観できるほど安い性格はしてないんでねえ」

なるほど、鬼らしい意見だな。

「しかし、以外に萃香もあっさり負けちゃったねえ。もうちょい粘ってくれると思ったんだけどさあ」

「俺の方だってそっくりそのまま返ってきてるんだよ。ほら、左手が血だらけだ。蒸発しきれなかった奴が残ってんのさ」

実は相当痛い。粉碎骨折よりもこっちの方が痛い。体感的な話ではあるが

まあ吸血鬼の治癒能力があればすぐに治ってしまうだろうが、けども血が足りないな。このまま倒れてしまおうか。

俺の意識はそこから混濁していった、そこから先のことは覚えていない。

壮絶で大規模で真っ直ぐな破壊の力（後書き）

やばい、なんかおかしい。

つまらないからって切らないでうまく書けなかったんです。本当に自分でもどこがおかしいか分からないんです。

次はもっと面白くしますから（汗）

思ったんだけどいま作者がネタにしようとしてることやってたら原作に全然入れない気がする。

じつはいっそのこと原作入らないで突き進んじゃおうか思ってるんですけど。

そこらへんどう思いますか？ よろしければ意見を聞かせてください。

つーかサブタイがネタ切れ気味。どうしよう。

葛藤は巡りきて彼は自分に嘘を付く

鬼との勝負から約三ヶ月ほどたった。

あの後目が覚めたら輝夜に抱きつかれるし、全身が痛いしで結構さ
んざんな目にあった。

もう既に傷は完治していて以前の状態に戻っている。そして、俺に
とっての大きな変化があった。

俺は鬼との勝負から、接近戦以外でも十分に霧や炎に頼らずに戦う
ことという課題を見つけ出している。

そして新しい紫黒の使い方を発見した。それが俺の戦闘時における
選択肢を大幅に広げることとなったのだ。

紫黒をなにもない空間から生み出して放出する、いわば遠くを攻撃
できる使い方ができるようになったわけだ。

そんなに遠くから発射できるわけではないが自分の周りから針を生
み出して無数に飛ばすというような使い方ができる。

結構威力があつて的を小さく絞れば鋼鉄の壁をもぶち抜く優れもの
だ。

それに俺が相手に近づかず、代償もないために接近戦が強力な相手
にも対応できる。これから先はどんな相手と戦うことになるのかわ
からないから戦略の幅は広い方がいい。

そういえば今日は帝が来る日だったっけ、だからこんなに周りが騒がしいのか。

しかし俺が目覚めた時の帝の反応は面白かった、俺のことすんげえ揺さぶって輝夜もどん引きしてたな。あんなに揺らして傷口開いたらどうするつもりだったんだよ。俺は着物汚しても弁償なんてしないぞ。

しかしもう輝夜の屋敷に住み始めて四か月になろうとしている、このままいけばあと八カ月程度でこの生活も終わりなわけだ、今のうちに存分に楽しんでおこう。
まあおそらく歴史どおりに物事が進むのだろうしな。

「さてと、そろそろ日も落ちてきたし外に出るかな」

こうやって平和なのはいいことだ、ずっと続けばいいのに……おっとこれはフラグか。今のはノーカンで頼みたいものだ。

そういえば輝夜はどこかな？　いつもならこの時間に俺の部屋に遊びに来るのに。

うや、俺の部屋に遊びに来るのについておかしいな。輝夜にとっては自分の家の中なのに、俺の部屋に来るが正しい表現か。

まあいろいろ忙しくたっておかしくはないだろ、一日会えないだけでご機嫌斜めになるんだけどな輝夜は。まあそれが輝夜らしいというべきか。

……しかし暇だな、することがなくて。

「ふむ、つまり近いうちに攻めてくるということか？」

「はい、それで間違いないでしょう。現に多くの妖怪たちと結託しています、草によれば三日後に活動を開始するとのことですよ」

帝は悩んでいる。今回の敵は妖怪ではなく人間だということに。

「あまり公には出来ん。密命を出す」

「では誰にこのことを伝えましょう？」

「今日、日が暮れてからかぐや姫の屋敷に行くことは知っておるな？ その時に霧殿に頼もうと思う」

非常に不本意ではあるが彼にしかできないであろう、と帝は付け加えた。

「本来なら彼にばかり厄介事を任せるのは気が引けるのだが……都の陰陽師には荷が重すぎる、都最強の妖怪の世話になるしかないの

でな」

帝は己の従者にこう伝えた、「決して彼に責任がいかないようにしろ、もし彼が攻められるようなことがあればどうなるかはわかってるな？」と。

従者は答えた、「承知しました」と。

そして部屋の外から声が聞こえてきました、「帝、お出かけの準備ができました」と。

俺は輝夜に呼ばれて広間へときた、そこではすでに宴会の準備は整っている。

思ったんだけど俺って輝夜のお気に入りってだけでここにいるんだよな、改めてかぐや姫の権力を思い知った。

「しかしこうやって何回も宴会してるけどあきたりしないの？」

「そりゃあおんなじこと何回も続けてたら飽きるわよ、だからいろんな場所でやるの。庭だったり和室だったりこうして広間だったり」

なるほど、発想が金持ちだ。

けどまあ帝も飽きずに来るわな、だって俺がここに住み始めてから

二十回は来てる。

そんなに輝夜が好きか、御執着か。まあ輝夜も嫌いではないらしいんだけど。いやだったら一緒に難題吹っ掛けてるとのことだ。

なるほど、妙に説得力がある。

「ん？ 帝が来たのかな？」

「そうみたいね、今日はいつもより遅いけどどうしたのかしら？」

確かに今日はいつもより来る時間が遅い、もう少し早くてもいい気がするけど……まあ考えすぎだろう。

さてと、今日も今日とて始まる宴会。まあ楽しもうじゃないか。

宴会終盤、今日はなにやら帝の様子が挙動不審なのは気のせいだろうか？

なにやら俺と目を合わせるのを避けている気がする。

俺の気のせいであろうか？ まるで俺を怖がっているような……少し違うな、まるで絶対無理なことを頼む時のような気まずさを持つ

ている。

「輝夜？ 何か今日の帝変じゃないか？」

「そうね。確かに遅れてくるといい、こんなにそわそわした彼は初めてかもしれないわね」

だろう、やっぱり俺だけじゃあないんだ。

なんだろう、その理由がつかめない。俺たちに関係することなのだろうか？ 帝一人でしまっておかなくてはならない問題なのだろうか？

俺のことを信賴してるなら教えてくれてもよさそうなのに。

「まあ……別に構わないけどさ」

俺は小さくつぶやいた。

しかし、時間がたてば時間がたつほど何かが変わっていく。まるで何かにあせらされるように。何か慌てた雰囲気だ。

そして、帝の方から声をかけてきた。

「少し外まで来てくれぬか？ 話がある」

「……わかりました」

あきらかに何かある雰囲気である。とはいっても断るわけにはいかず、俺はついて行くことにした。

「こんな突然呼び出して何なんだ？」

帝は何かを決心したようにうつむき、俺に向かって話し始めた。

「なあ霧よ、もし初めて霧と会ったとき儂がお前を殺すように命じていたらどうしていた？ 儂らを殺したか？」

「何だいきなり、まあとりあえず出来るだけ殺さないように逃げろわな」

帝はまた質問をする。

「もし、人間が妖怪と全面对立して、人間と戦わなければならなくなればどうする？」

「逃げるさ、俺は今でも心は人間だ。今までだって殺さずになんとかやってきた」

「じゃあ今ここで人間を殺してくれと頼まれたらどうする？」

「何が言いたい？」

俺は帝を軽く睨みつけた、こうしたほうが早いのはいままでから学んでいる。

「密命を受けてほしい」

「……理解した」

要するに、人殺しをしろってことだな？

密命と言うくらいだからあまり公にできない話なんだろう。汚さそうなことだ。

「そうだ。霧には妖怪と結託し、都に攻め入ろうとしている計画をつぶしてほしい。申し訳ないが……関係者は全員口封じしてくれると助かる」

……おそらく、一人でも逃がせばそのことが世間にばれることを避けたいのだろう。

仮にも人間を殺すわけなのだから、それもまだ何もしていない。おそらくあまり人聞きは良くはないだろう。

俺だっていい気はしない、いくら妖怪と結託しているからと言って人間を排除するという考えを。けれども帝としてはなくてはならない、民の安全を第一に考えると不安要素は消し去らなければいけない。

そして知っているだろうか？ 一度裏切られた人間はどこまでも冷

酷になれるということを。

「わかった、受けようじゃないか」

「助かる、本当にすまないな」

それでも自分は自分の気持ちより恩義を優先させてもらう、俺はこの帝の作る街がともいいものになるのならば自分に嘘を付く、それが自分を苦しめることになるうとも。

そして驚くほど冷静な声で聞く。

「決行はいつだ？」

「明日の夜、ノルマは全滅だ」

俺は、その後聞いた話だがその時の俺は少しだけ怖かったらしい。

一度裏切られた彼は冷酷な色へと染まっていた

俺は今まで人間を殺したことはない。

何があっても決して殺さずにやってきた、たとえそれがどんな場面であらうとも。

けれどもそれが今日の夜で終わる、帝の頼みとは言え少々心苦しいものだ。

今更殺すことに抵抗がない自分も怖い。もう心まで妖怪になってしまっているというのか、それとも一度裏切られてこころが麻痺してしまっているのか。

それすらもわからない。

だが、それをしなければならぬというのわかる。「俺は帝の作る都」を支援すると決めたんだ。そのためには相手が人間といえども手段は選べない、害をなすものは消さなくてはならない。

「それで、その家にいる奴全員が対象なんだな？」

「草は全員避難させてある、手加減などいらぬぞ」

それはわかっている、ともかく今夜日が暮れてから……とはいっても、もう日が落ちかけている。密命開始まであと三十分もないだろう、調べによると日が沈んでからすぐの時間帯に全員集まることになるらしい。

「そういえば、近くに人は住んでないのか？　いくらなんでも隣の家の人住人に気づかれるなって言うのは無理な話だぞ？」

「それに関しては大丈夫。もともとからまちから離れた所に屋敷を構える変な金持ち、ほれ、町の西は森じゃろう、そこに家を建てているのだよ。まあ今まで妖怪に襲われずに済んでいる時点で怪しむべきだったのかもしれないがの」

なるほど、つまりある程度は遠慮なくやっていいわけか。それはありがたいな。

「隠蔽工作はきちんとしてくれるのか？」

「もちろん、一応屋敷の騒ぎが聞こえてくる範囲の住民には屋敷に招待を送っている。なあに、ここ最近であちこちの住人をまとめて呼んでは意見を聞くなんてことをやってるのでな、怪しまれはしないとして」

……ははあ、なかなかの策士じゃないか。なかなか手が早い。やっぱり侮れないな帝は、まあそうじゃなきゃ帝なんて役職にはつけていないだろうけど。

ともかく、俺の「楽しいお仕事」はもうすぐ始まるわけだ。準備を始める、準備とはいっても栄養摂取しかすることがないんだけどな。あとは鉄分とかちゃんととること。

「さてと、これから大一番だ。気取らずに行けるかな？」

「様子はどうか？」

「はい、どうやら話し合いを始めた様子です。どうやら草が抜けた分以外は全員集まっているとのこと、数えられただけで百は超えております」

「そうか……そろそろ霧を呼べ、彼に全てがかかっているんだ……」

帝は、「こんなときに自分に戦うすべがあれば」と、そんなことを考えていた。

彼とて、親友を傷つけたくはなかったわけだ。

「どうなるのか……何事もなくことが進めばよいのだがな」

密かに祈りを捧げる帝は、誰に祈っているのかもわからなかった。

「霧殿、準備は出来ておりますか？」

ああ、確かこいつは帝のそばにいつもいる奴だ。名前はなんだったっけな？ たしか帝の直属の召使いの中で一番足が速いんだ。

「ああ、いつでも行ける」

これから人間妖怪関係なく殺しに行くってのになんだかいまいち実感がわかない。

これじゃあいざ殺めた時が一番怖いな、反動が大きく返ってきそう
で。

「案内してくれるか？」

「はい、ついてきてください」

そして案内されながら俺は思い始めた、だんだんと町のはずれに来ていると。

たしかに好き好んでこのような場所に住むというのはそれだけで怪しいだろう、ましてやそこそこの金持ちらしいただの酔狂でしかないと思うのだが……

そして一行は森の中へを進軍していく、とはいっても全部で四人しかいないのだけど。

ともかく、結構険しい道のりだった、道路が整備されているわけで

もなく獣道を通っているという感覚が一番近いのかもしれない。周りの木々がどこことなくこちらを不安な気持ちに追いやるかのような威厳を見せている、それはおそらくかすかに残る妖力のせいであろう。まあまず都の陰陽師には気付けない。俺だって本当に注意して探らなければわからなかったんだ。人間で見破れるとなればそれこそ最強の陰陽師を名乗ることが許されるだろう。

そんななかを歩いて行くと一つの大きな屋敷が見える、貴族の屋敷と何一つ変わらないつもりだが、中から発せられている微量の妖力に違いを見せつけられる。しかしここまで隠し通せたことに関しては称賛を贈ろう、確かにこれは言われなければ気付けない。

これは、力が小さすぎて気付けないのではなく。巧妙に隠されていて気付けないタイプだろう。かなり手ごわいやつまでいることも予想されている。大妖怪クラスもいるかもしれない。

「ここまででいい、あとは俺がやる」

「わかりました、どうかご無事で」

……わかっているさ、帝に変な責任をおわせる必要なんかない。俺がすべて丸く収めてしまえばいいのだ。それが後味の悪い方向に向かおうともな。

去っていく従者たちを見ながら俺は思う。

ここまでの妖怪屋敷、全力を出さず越えられるだろうか。できるだけ騒ぎは小さい方がいいけども……。

ここで俺の吸血鬼としての器量が試される、なぜだかわからないけどそう感じた。
誰にも気づかれないうちに全てを終わらせる。それができたら最高ののだが……

「とにかく、やってみなきゃあ始まんないよな……」

とりあえず侵入してみることにした。

玄関から本殿に行くまでは誰もいなかった。おそらくは警戒を全くしていない証拠だろう。

まあここまで気配を隠せるのなら確かに要らない気がするが。

そして建物の中に入っていくと、妖怪が一人だけいた。なぜここにいるのかはわからないが、見つかるはずなので早速消えてもらう。

俺は名も知らない妖怪の背後に回ると紫黒で首をかつ切った。後には死体だけが残る。正直声を全くとっても上げなかったことには感謝している。これでまだ探索を続けられるからな。

しかしこれでは進めば進むほど気分の悪いことになって行きそうだな。これからどこまで冷酷な色に染まらなければならないのか。それを

考えただけでも気分が悪くなってくる。

まあこれも自分で決めたことなのだから、後悔はしていないが。

そして進んでいくと、何人かの妖怪が話しながら廊下を歩いてきた。話を聞いているとこれから見張りに出るらしい。

どうやら誰も見張りがいないのは油断などではなく、ただたんに交代の時間だったと言うことだ。これは運に恵まれたな。

そして、俺の隠れている部屋の前を通り過ぎた瞬間に行動を起こす。影からそっと紫黒を使い、全員の体を串刺しにした。

これもまた断末魔をあげる前に口をふさぐ、声にならない悲鳴と、困惑の表情をしながら六人の妖怪たちは死んでいった。

この調子じゃあどのくらい時間がかかるかわからない、正直まとめ相手にできると助かるんだけどな。

まあ大妖怪クラスもいるわけだし、むしろ奥の方に入ったこれからが本番なのだろう。

おれは、一瞬だけ深呼吸をしてから奥へと進んで行った。

進んでいくうちに、話声のする部屋があった、中から感じられる気配からするに、結構力の大きい妖怪たちもいるらしい。

これは結構なチャンスである、声の種類だけでも十人はいることがわかる。一網打尽にするチャンスでもあるわけだ。

俺は紫黒を構えて部屋を覗きこむ、幸い誰も俺のことなど気がついていない。

おそらくはここまで来れるわけがないと思っているのだろう。それが命取りだ。

俺は部屋に滑り込み、手始めに目の前のやつを吹っ飛ばす。

全員がこちらを向いたが無視、面倒なので全員紫黒を飛ばして串刺しにすることにする。

俺の周りに紫黒の針が人数分、十二本ほど現れる。そして一斉に飛び出して全員を貫いた。

これはおそらくみな即死であろうが……

そう、俺の詰めが甘かった。そう、新たに部屋に入ってくる妖怪、そしてそいつはおそらくこの状況では当たり前前の行動をとった。

「誰か来てくれー！侵入者だ！」

畜生……騒ぎにしないでって言うのはここまでか。せっかく上手に行きそうだったのに残念だ。

俺はとりあえず叫んだ妖怪をこれ以上声を出さないように口封じする。そして無数に聞こえてくる足音を迎え撃つことにした。

まず、廊下の角からこちらに曲がってきた妖怪に向かって走り出す。そしてあとからついてきていた妖怪二人ほどをまとめて霧に包み、壁ごと破壊した。

この音でおそらく屋敷中に気づかれてしまうだろうが問題はない。まとめて倒すだけだ。その方が効率もいいし能力の使用も少なくて済む。

とりあえず下手に隠れられないように周りの壁をすべてぶっ壊す、ある程度巻き込まれてくれたらそれでいい。

破壊の霧が俺の周りで渦巻いている、そして俺の周囲だけとても広々とした空間になった。隠れていた連中も慌てている。

そしてそういうやつらに片っ端から紫黒を飛ばす。紫黒の針は、まるで投げ槍の槍のような感じで、とても使い勝手がよい。まさにこういう場面でも全方位に発射できるために死角への攻撃までカバーできて文句もなしだ。

何人かが残ってしまったがそこは各個撃破でどんどんつぶしていく。紫黒で直接貫いたり、霧を使ってふっ飛ばしたり。

さすがに建物ごと燃やすような真似は俺だってしない。まあもしかすると証拠隠滅のために火事にするということもあるかもしれないが……というかここまで来てしまったらするしかないだろう。

けど今は我慢だ。どさくさに紛れて逃がしてしまったら元も子もない。

そして俺は新たに壁をぶち破り、奥の方へと走って行った。

そして廊下に飛び出し、まだ壊されていない通路を走る。騒ぎ声が

聞こえなくなったことからもう残り少ないということがわかる。
こんなにあっさり進んでしまうことに不自然さを覚えながらも俺は
走る。

そして新たに部屋を開けると、そこにいるのは妖怪ではなく……一
人の人間だった。

そう、一人の人間が部屋の隅で小さくうずくまっているだけだった。
おそらくこいつが今回の首謀者だろう。少しお話ししようじゃないか。

「なあ、ちよつといいか？」

「なっ……お前が侵入者か！ 誰か、誰か来てくれ——」

しかし、答える声は何もない。

「残念だけど、もう全員死んでるよ。残ってるのはお前だけだ」

俺は冷酷に、残酷に事実を突き付ける。こうしたほうがこういう奴
は嘘がつけなくなるんだよ。冷静さを失って偽りを言う余裕なんか
なくなつて。その結果自分の知っていることしか言わなくなる。と
いうか言えなくなるんだ。

「さてと、お前が首謀者でいいんだな？」

「違う……絶対に違う！」

「本当か？」

少し睨みを利かせれば……ほら、たとえばこうやって持ち上げるとかしてさ。

「わかった、俺がこいつらをまとめてた。わかったから離してくれ！」

「そうか、お前が犯人なわけだな？」

こうやって自白してくれる。

「最後に聞くけどこれで全員か？」

「ああ、全員だ。もう終わりなんだよ……もう何もしないから助けてくれよ……」

「残念だけど、ここで逃がすわけにはいかないんだ。だからおとなしく死んでくれ」

「―――最後は断末魔も上げなかった。ずいぶんあっけないものだと俺も思う。」

そして初めての人殺しは、なにやら生ぬるい感触しかなかった。

「さてと、最後に全部証拠を消すとするか」

俺は燃え上がる炎を出し、あたりを燃やして行った。

あと二十分もすれば、ここには黒こげの屋敷と一人の人間の死体しか残らない。

月の姫君は地上の騎士に何を見るか

「じゃあ後は俺はすることはないんだな？」

「ああ、ご苦労だった」

あのあと屋敷を燃やすのは、二十分くらいですぐ終わってしまい。迎えが来るのを待つのも面倒だったのでこちらから帝のところに報告しに行った。

もう後に残っていることは帝の方で済ませてくれるそうなので、俺はそろそろ屋敷の方へ戻ることにする。

しかし、なんだか疲れたな、体も重いしどうしたんだろう？ 確かに結構暴れたりしたのはけどもそんなに消耗はしていないはずだが……あれ？ なんかくらくらしてきた。

なんか目の前が良く見えなくな——

「霧殿！ どうした、大丈夫なのか！」

突然倒れた霧を抱きかかえるように叫ぶ帝、明らかに異常があるのは目に見えているために声が大きくなっている。

「誰か医者を呼んで来い。あと横になれる場所と水を！」

帝は自分たちでできるであろうことをするためにその知恵を振り絞る。けれども相手は吸血鬼、人間の常識が通用するとも限らない。

「とにかく出来ることをするぞ」

このとき、帝が本気で走るのを従者たちは初めて見たという。

目が覚めてみると、見知った屋敷の天井が見えた。

輝夜の屋敷だ、どうやら俺はあのあと……どうなったんだ？ まあ状況的に気絶か何かしたってことだろう。

しかし、どうしていきなり倒れたりしたんだ？ 考えられるのは力の使いすぎか、積もり積もった疲労か、他の精神的な要因か……わからない。

ただ、今はいつも以上に調子がいいことはわかる。何があったのだろうか？

「さてと、とりあえず誰かを探さなきゃならないかな……」

よくよく思うと、今自分が寝ているのが輝夜の部屋だということに気がついた。いったいなぜ？ 起きたら輝夜の部屋にいたなんてこのフラグだよ。

ともかく誰かいらないかな……

と、部屋を出ようとした瞬間に襖が開いた、そして向こう側からは輝夜が。

……正直とても気まずい。あのトイレの個室から出てきた人と目があった時よりも微妙な感じがする。なに、たとえばわかりづらい？ 文句は作者に言ってくれ。

「あ、えっとおはよう」

「……本当に霧？」

えっと、霧ですけどなにか？

「あんたひとをどんだけ待たせれば気が済むのよ。自分がどれだけ寝てたかわかってる？　八か月よ、八か月もずっと寝てたんだから！」

「八か月！　んな馬鹿な。そんなわけないだろう」

八か月も寝てるなんて正直考えられない。けど輝夜がここで嘘を付く必要なんて全くないんだよな……これは信じるしかないんだろうけど。

「えっと……良くわかんないけど悪かった」

「……ちよつと一人にさせて頂戴」

あれ？　なんかご機嫌斜めなんですけどどうしよう。というか何か暗い感じでいつもの輝夜となんか違う雰囲気……

と、俺はそこで理解した。俺は八か月の間寝ていた。つまり輝夜が月に帰るまではあと一ヶ月くらい。つまりそろそろ次の満月の時にくが来る時期なのだろう。

ともかくいったん一人にさせてやるか。これは俺だけではどうしようもないだろう。

輝夜が自分からこのことを言いだすまで待つしかない。下手に何か知っているそぶりを見せたら明らかに怪しいだろうからな。

神奈子と諏訪子は俺がかぐや姫のこと知ってるの知ってるけどさ。それとこれとは話が別だろう。

俺は輝夜の部屋を後にした。

その日の夜は、帝が屋敷の方に駆けつけてきた。どうやら俺のことを本当に心配してくれたようで。俺としても感謝しなくてはならない。なんでも俺が倒れた時、医者と呼ぶように指示したり介護してくれたりしたのは帝らしいからな。

そして、俺は帝に紹介された医者から詳しい話を聞いている。

「……なるほど、血が極端に」

「はい、あなたの血液が極端に少なくて、薄かったのです。おそらくは今回の眠りも体の機能が十分に働かないために、自己防衛のようなもので眠りについたのでしょう」

そして一言付け加えられた。

「まあ、おそらくこれだけ長かった理由はおそらくほかにも理由があると思いますけどね、それがどういうものなのかはわかりませんが」

……つまりは能力の使い過ぎで体調を崩したと。まあ自業自得なわけだ。

けどまあそんなこともあるんだな、確かにハイリスクハイリターンな能力だが。それでも今までこんなことはなかったのに。

まあおそらくはこの間一度にたくさん能力を使ったからだろう。あれほどまで大規模に使用したのは確かに初めてだ。

「つまりは能力の使い過ぎには注意しろってことですか」

「はい、まあ滅多に今回みたいにはならないとは思いますが……一応それだけの生命力があれば滅多に大事になることはないと思います。あくまで人間の常識ですけど」

なるほど、まあ人間も吸血鬼も根本は同じだし医学でも通じることもあるだろう。

とにかくこの医者には感謝しなくちゃならない。

「今回はありがとうございます」

「いえいえ、医者として当然のことをしたまでですよ。では私はこれで」

そう言って部屋から出て行ってしまった。そして入れ違いで入ってきたのは帝。

おそらくかなり心配をかけてしまったのだろう。帝のことだから自分の依頼のせいで俺が倒れたとかそういう感じに捉えてるかもしれないし。

「もう大丈夫なのか？」

「ああ、とにかく助かったよ」

とにかく、こうして変わりなくて何よりだ。

「ところで霧よ、かぐや姫の様子がおかしいことには気がついたか？」

ああ、やっぱりこの話題になるのか。まあ帝が心配する気持ちもわかる気がする。

俺だって事情を知らなければ何事かと思うだろう。

「はい、なにやら元気がないようでしたが」

「そのことなのだ。ここ数カ月かぐや姫が元気がなくての、毎晩月を見上げては何やら考え事をしているようだな」

……やっぱりか。おそらく月に帰る日が近いのだろう。そろそろこの生活ともお別れか。

「なにか心当たりはないかの？」

……ここで正直に答えるわけにはいかない。ここは知らないふりをしておこうか。

「わかりませんね」

「そうか……まあ何かあれば彼女の方から何か言ってくるだろうが」

と、そこへ帝の従者の一人が部屋に入ってきた。

「帝、かぐや姫が呼びです。霧殿も広間の方へおいで下さい」

「わかった、すぐ行こう。霧殿もほら」

「そんなせかさなくても行くって」

俺はついて行きながら考える。このタイミングで俺や帝に用があるってことは……まさか？

そして広間に集まった一同は、輝夜の方へと皆注目していた。そして輝夜がゆつくりと口を動かす。

「みなさん。突然のことですがお聞きください。私は次の満月になったら月へと帰らなければなりません」

一同にざわめきが広がる。

そして輝夜は歴史通りのことを説明し始めた。自分が月の住人だということや、蓬萊の薬のこと、そして次の満月で迎えが来て、月へと帰らなければならないこと。

それだけ言うと、輝夜は自分の部屋へと入って行ってしまった。

後に残された者たちの中では、様々な声が飛び交っている。

信じられないというものや、何としてでも阻止しようというもの。色々いた。

帝はと言うと……

「霧よ、かぐや姫のところへ行つてやれ。今の彼女にはおぬしが必要だろう」

俺はその言葉にうなずきで返すと、輝夜の部屋へと向かって言った。

「輝夜、入るぞ」

俺は一応一声かけてから輝夜の部屋へと入って行った。そこでは輝夜が月を見上げて悲しそうな顔をしていた。

輝夜は、おそらく月に帰らなければいけないことを悲しんでいる。だってそうでなければあんなに悲しそうな顔をするはずがないから。そこら辺は原作通りなんだろう。

だったら、俺が背中をひと押ししてやればいい。輝夜が月になんか帰らずに、永琳と一緒に永遠亭まで逃げるっていう覚悟を決められるように後押ししてやればいい。

まあ永琳が来るのを知らないんだから、地上のどこかに逃げるようにだが。

「輝夜、本当の気持ちを言ってみて」

「いきなり何よ、私は月に帰んなきゃならないの。だって月の科学はすごいだよ、私たちじゃ逃げ切れるはずもない。おとなしく捕まるしかないの」

なるほど……これは典型的な例だ。月の力の前に卑屈になってしまっている。

「本当にそれでいいの？ 輝夜はこの、地上の民が大好きなんですよ？」

「……煩い、だからって霧たちに何ができるの？」

「できるよ、俺には力があるからね。月人なんて簡単に追い返してやるよ」

輝夜は、一瞬だけ俺の方を見たが、すぐに月の方へと視線を移してしまった。

「月の方にね、残してきた人がいるの。私はその人に会いたいので、だからね……」

永琳のことか、それが来るなんて俺が知ってたら不自然だよなあ。ここはひとつ、ご都合主義とやらに頼ってみるか。

「そんなに大事な人なんだったら、向こうだって早く会いたいはずだよ。だったら来てくれるんじゃないかな？」

少しでも、輝夜に地上に残りたいと思わせること。それが俺の今の仕事だ。

「それにさ、一回逃げちゃえばわかんないんじゃない？　だって地上はこんなに広いんだ、月人だってどこにいるのかわからない一人や二人見つけるのなんかできるわけないだろ」

……俺が言えるのはこのくらいか、けどもうまい具合に進んでくれるかなあ。

「……ねえ、もしも私がどこかに逃げ出してしまいたって言うたら手伝ってくれる？」

「ああ、もちろん」

……手ごたえはありか。これは当日にかけるしかないかもしれないけど。

騎士は姫君を守る盾であり剣でもある

運命の日がやってきた、今日は満月。月からの使者が輝夜を迎えに来る日である。

輝夜の屋敷の周りには大勢の兵士や陰陽師たちが並び、おそらくは厳戒態勢であろう。都全ての実力者を集めているとは言っても過言ではない。そのくらいの規模の人数が集まっているのだ。

これで帝の権力と、かぐや姫という存在がどういったものなのかを改めて再認識させられることになった。要するに二人ともすげえ。

そして俺は、輝夜の一番近くにいることを許されたというか任されたというか……とにかく俺は輝夜と月の使者との交渉に割りこめる存在になっているのは確かである。まあこのようなことにならなくても実力行使でむりやり押し入ってやるが。

そして輝夜はと言うとどこことなく緊張した顔つきだ、やはり怖いのだろうか？ まあそれが当たり前のような気がするが。

そして俺はできることを最後にしてしまおう。

「輝夜、今日一日くらい我儘になれ。自分の思った通りのことをすれば絶対に後悔はしない。最後に決めるのは自分だ」

「……うん」

やはり返事の声が小さい。まあこの状況で普段通りのテンションを求めるというのも無理な話かもしれないけど。

けど元気がない輝夜を見ると、なんだかこちらは守ってあげたいというかそんな気持ちにさせられる……これがカリスマというやつなのか。

……月の使者がもうすぐ来ることは確かである。万全の態勢で迎え撃たなければなるまい。

場合によっては戦闘に……いや、おそらく輝夜が逃げることを選択した場合間違いなくなるだろう。というか原作通りに行くならば間違いないのだ。

そうなれば俺が最後の砦だろう。おそらく月の最新兵器に対応できるのは俺だけだ、他のやつらはどういうものかもわからないうちにやられるのが落ちだろう。

とにかく、永琳は戦力として加えられるであろうから二人で輝夜を逃がさなければならぬ。迷いの竹林の場所は知らないが永琳がいるのならたどり着けるだろう。多分。

つまり俺のノルマは月の使者を全員倒すことではなく、何とかして逃げる時間を稼げばいいわけだ。その気になれば俺が全部ひきつけてしまうという手もある。

まあ引つかかるほど相手も馬鹿ではないだろうけど。

……とまあ、ざっと考えることはそのくらいだ。細かい作戦は考えるだけ無駄であろう。

と、そこで突然輝夜が俺の腕を引っ張って……

「霧、見えてきたわ。あれが月の迎えよ」

輝夜に言われたとおりに空を見上げてみると、月に黒い点がぽつんと見える。おそらくあれに乗って月の迎えが来るのだろう。そしてあの中には永琳もいる。

外の連中も騒ぎに気がついたようだ、だんだんと騒ぎ声が聞こえてきた。

「さてと、一応閉めとくからな」

歴史どおり出入口はすべて閉ざしておく。まあ一斉にここまで開かれてしまうのだったら意味がない気がするが。一応やっておく。

どうやらもう顔の見分けがつくところまで来たらしい、少しばかり覚悟決めるか。

しばらくすると、外からひととき目立つ声が少しもれてきた。おそらく月の使者が拡声器のようなものか何かで声をそこらじゅうに伝えているのだろう。

しかし、それにも勝るとも劣らない他の連中の声で何を言っているのかはわからない。

そして、襖がすべて開かれて外から丸見えになった。やっぱりこうなるわけね、いや予想はしてたけどさ。

そして輝夜は真っ先にこちらへ来た人物に駆け寄って行った。もうこの時点で誰かは予想は付くと思うが……

「永琳！ 会いたかったわよ」

「姫様……ご無事で何よりです」

おお……他人行儀他人行儀。やっぱり久しぶりの再会って言うのは感動を誘うね、俺は別に平気だけど。

「永琳、私ね決めたの。ここから逃げ出して地上に住むわ！ 月のことなんてもう知らない、私地上が好きなの。手伝ってくれる？」

「姫様……はい、わかりました。では少しお待ちください」

……やっぱりこうなるんだな、俺の説得が効いたか。とにかくそうときまれば俺も手伝ってやろう。ここから俺にとっての本番だ。

「どうした、何をしている永琳」

二人の様子がおかしいことに気がついた月の使者の一人がこちらへと駆け寄ってくる。

俺はそいつに向かって走りながら輝夜にそっと耳打ちした。

「（輝夜、あとは俺に任せて二人で逃げろ）」

「えっ、でも……わかったわ。絶対にまた会いましょう。永琳、あとは霧に任せて逃げるわよ！」

そうだ、それでいい。

そして俺は武器を構えた月の使者を蹴り飛ばした。我ながらかなりの威力だったと思う。そしてそれが引き金で戦闘が始まった。全部で二十二人、間違いはないな？

「永琳、逃げましょう」

「姫様……あの男は誰なんですか？」

「詳しいことは後、霧なら時間を稼いでくれるわ……（死んだら承知しないんだからね！）」

そして輝夜は永琳の手を取って走り出す。そしてすぐに状況を飲み込んだ永琳が弓を構えて走り去って行った。これで俺が誰も通さない限り二人は安全だろう。

さて、あとは俺にかかっているわけだ。見れば他の連中全員のびてるじゃねか。

そして俺は大きな声で宣言する。全員の注意がこちらへ向くくらいの声で……

「おまえらの相手は俺だ！ 二人を追いたければ俺を倒してからにしろ！」

すると、俺の予想以上の挑発になったらしい。全員が俺の方を向いた。

俺は紫黒で周りに倒れてる連中をふっ飛ばした。邪魔になるだけだからな。そして炎で周りの地面を燃やす、向こうは俺の力の大きさに気がついたらしい。全員でかかってくるようだ。

さあ、防衛線の始まりだ――――

どうやら主装備はレーザー銃らしい、さっきから光線バンバン撃たれまくってる。

俺はその猛攻をぐりぬけ、早速一人目を仕留めた。そのまま二人めも紫黒で殴って気絶させる。

返り血で顔が赤く染まるが気にしない。全部終わった時に考えよう。ただ気分はあまりよろしくはない。仮にも人間なんだからな。けども不思議となんともない。まあ一回殺してしまっているから何あるうが。

さすがにそれ以上は続かず、追い込まれてきたのでいったん退避する。

そしていったん全体を見渡せる位置に移動する、すると輝夜たちの逃げた方向に行こうとしている奴が一人いた。

「逃がすかつ！」

俺は霧をそいつに向けて放出し、まわりの木々ごとなぎ倒した。このなかで生き残れる方が不思議である。

そして俺の左手の甲からも血が流れ出す、毎回こうなのでもう慣れてしまった光景だ。力を使えばそうなる。

すると、後ろのほうから足音が聞こえた、おそらく回り込んで確実に仕留めるつもりだったのだろう。

俺はすぐさま向き直り、炎でまとめて飲み込もうとする。

あたり一面を覆い尽くす火柱は何人もの月人を巻き込んで天へと昇る、しかしそれで全員しとめられるほど甘いわけがない、きっちり何人か避け切っている。

そいつらはレーザーを撃ってくるので右へ左へ飛びながらそれを回避していく。

そして紫黒を飛ばしていくが一向にあたらない、どうやらなかなか戦闘能力の高い連中が集まっているようだ。

けれどもそれもここまで、さすがに避けようのない攻撃まで避けるほどの連中ではあるまい。

俺は霧を全力で周りにまき散らした。その怒濤の津波に全てが巻き込まれていく。まわり一面が同じ色に染まる光景はなかなか幻想的だ。

そしてもう一回炎を周りにまき散らす。あらゆる所に侵食しているそれは、すべてを飲み込んで大きくなっていった。

そして、残ったのは誰もいなかった。こんなに簡単に終わってしまったのは拍子抜けしたが、所詮月の民なんて科学力が優れているだけ

だと認識させてもらう。

さてと、あとはこいつら適当に埋めとくか。

それからは、穴を掘って埋めるだけの単純な作業に終わった。証拠隠滅はよし、あとは俺が何も知らないふりをすればいいんだ。

この返り血は適当にでっちあげるか、一人くらい倒したっていてもそれが本当かは誰にもわからない。

周りの損害を確認してみる。屋敷は半壊、周りの自然もめちゃくちゃだ。

さてと、まあここまでやったんだからうまく行ってくれてるといいな。

まあ永琳もいるんだし、輝夜もうまく逃げられたとは思っけども。

あのは、特に何も起こることは無かった。
俺は何も知らないで何とかごまかし、かぐや姫は月に帰ってしまったで結論づいた。

あのと帝のところに届けられていたらしい蓬萊の薬は、処分されたと見せかけて妹紅が飲んだのだろう。多分。

あのとから、都は少し活気がなくなったものの、いつも通りの生活が戻っていた。

俺も帝も、今ではただの友人通し。まあ一応俺は帝の所で陰陽師をさせてもらってる。評判はなかなか良くて、仕事には困っていない。

帝は、かぐや姫がいなくなったときはかなり落胆して、仕事もうくに手を付けられなかったが最近はずいぶん戻ってきている。それに蓬萊の薬を処分したことを後悔はしていないらしい。さすがだ、潔いところは潔い。そこは尊敬させてもらうぜ。

「なあ霧よ、お主なら本当のことを知っているのではないか？」

「なんのことだ？」

突然帝がこんなことを言い出した。

「なに、かぐや姫は本当に月に帰っているのかと思ってな」

.....

「俺は知らないよ」

「そうか、突然済まないな」

今頃どうしてるんだろうか、輝夜は。永遠亭にたどり着いたのかな？
次に会う時はいつになるかわからないけど、まあ元気でやって
いるんだろう。

そしてそれから、大きな事件が起こることもなく――――――

――

騎士は姫君を守る盾であり剣でもある（後書き）

えーと、とりあえず次回は時間を何十年か飛ばしたいと思います。そろそろ次のキャラとか出したいのできっかけまでという感じで。というかもこたん出します。

もこたんの口調は原作口調で行きたいと思います。女の子っぽい感じで。

まあとにかく竹取物語編、終了です。

けど後でもちろん再会させますよ、いつ原作に入れるかは未定ですけど。

まあ多分その前に迷いの竹林に行かせると思うので。

というか本当に原作入らずに突っ走ろうかとか考えてますから。だって原作入っちゃったらストーリーが決まっちゃってそれはそれで寂しい気がしませんか？ あくまで僕個人の意見なんですけどね。まあいつかは本当に入るんですけども。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449z/>

東方吸血鬼

2012年1月9日20時50分発行